

ツメ 爪は茅芽。

ツモ 積ルは積ムの延。

ツヤ 語根ツヤ 音義語 艶、ツの圓き意にヤの相向ひ重るを結びたるか。例へば

光彩陸離などいへるが如く、圓き意味の相重りたる、目も綾なる有様に基づきたるか。

ツユ 露、は潰ユの約。

又音義ツの圓きにユの控ふるを結ぶと見るも宜しい。

ツヨ 語根ツヨ 音義語 強、ツの強きにヨの控へ寄するを結ぶ。

ツラ 語根ツラ 音義語 ツの連るに、ラの取締らぬを結びたるが蔓で、連ヌ、貫

ク、列ラグ、など皆是に屬する。面は連りて見ゆる意味か。無情シはツレナシの約。

ツル 語根ツル 音義語 ツの連るにルの引き寄するを結びたるが蔓。其のルを活

語としたるが釣ル。釣ルを固定させて更にサ行の活語を付けたるが吊ス。蔓を更に締

むるムに働かせたるが蔓ム、即ち婚ム。釣瓶は字の如く、へは添ひ寄る意にて物を容

るゝ器。

ツル 音響語 鶴、其の鳴く聲。

ツレ 伴、連ネの約。無情シは伴無シ。

ツエ 語根ツエ 音義語 杖、ツの突き當るにエの添へ寄せ止むるを結ぶ。

テ 語根テ 音義語 夕行第四段、連ねて送り續くる、強き勢を持ちて廣がる等の

義あり、概しては固きものゝ退く意を持つ。

單音語、手は右音義の双方を兼ね具へて有形無形に出没し、千變萬化の秘術を盡す

こと、千手觀音も音ならず、調法至極のものである。先づ手近き、手頃なる、手易き

邊から出發して、終に手太き、尊貴に至る。上に下に此の手を借る語は無數であるが、

さる代りには本來の音義語として此の音に屬する獨立の語は甚だ稀である。

助語のテは右の第一の意。

テコ 挺は手子。又手木。

俗語出鱈目は雙六の采より來る「出タル目」即ち豫定せず、出次第に任する意味に取れるか。

テテ 爺は父の通轉か。

囧は鳥捕の轉かといふ。綴衣は綴レの通轉か。

テラ 街フは照ルの延、内外轉。

テラ 外來語、寺、朝鮮語セオルの轉。

テル 語根テル 音義語 照ル、テの強き勢ひを持ちて廣がるを動くルの活語に働

かせて此の語をなす。テ音の第一次音義語は、手の單音語の外には唯此の一語あるのみである。

ト 語根ト 音義語 タ行第五段、詰り窄まる、固まる、強き、早き、詰りたるものを長く續くる等の象あり、概しては固きもの、降る意を持つ。

單音語、戸、門は詰り窄まる意。砥は強き意。利、疾は早き意。外は詰り窄まりた

るものを長く續くる意、遠きのトなどの原である。

トカ 語根トカ 音義語 トの詰り窄まるにカの隠れて怪しきを強め結びたるが咎其を締むるムに働かせたるが咎ムル。咎は、要するに罪の包ミに於けると同じく包み隠して爲すことを指したので、即ち公明正大ならぬのである。隠し包むを罪咎とする我が國民の民族思想が、此處にも遺憾なく表はれて居る。

尖リは利クアリの約、利カリの強め。石龍は疾駆、其の疾きより來るか。

トキ 時は疾キ意。

トク 語根トク 音義語 トの強きにクの別る、を活語としたるが解ク、其のクを強めて更に活轉したるが途グ。利クのクを強めたるが利クなす意味にて研グ。

トケ 語根トケ 音義語 トの強きにケの別けて送り出すを結びたるが棘。

トコ 語根トコ 音義語 トの詰り窄まるにコの引き付け窄まるを結びたるが、底止定着の意味にて床、常、所、地。トコロの口は助音。

永久トコは常トコシガ、シは助音。

トシ 語根トシ 音義語 トの強き早きにシの落ち着く意を添へたるが利シ、疾シ。過ぎ去ることの疾トき意味より年ト。

刀自は支那の古語老女をフ負となす。我邦中古負字を誤りて刀自の二字となしトジと呼べるなりといふ。

トツ 語根トツ 音義語 閉トヅル、トの詰り窄まるに、詰るツの強メを活語として此の語をなす。

嫁トグは戸ト嗣トグか、乃至屈トクの轉か。

トテ 助語を見よ。

トト 語根ト 音義語 トの詰り窄まるを二つ重ねてノの物に添ひ窄まるを加へて外に求むる意なきこととなる。其に合はするフの活語を付けたるが調トフ。トトの第二を強めて、締むるムに働かせたるが止トム。留トム。其を引き付くるクに働かせたるが屈ト。

ク。

滞トルは止凍トル。百トは十トの意。

トト 音響語 轟トク、トドロは音聲、クは活語。

トナ 語根トナ 音義語 トの詰りたるものを長く續くるに、ナの物に添ひて現はるムを結び、フの活語を付けたるが唱トフル。トの詰り窄まるに、ナの物に添ふを結び、ラ行の活語を付けたるが隣トリ。

トネ 舍人トは殿居トリの略かといふ。刀禰トは又其の略。

トノ 殿トは戸内トの略といふ説あり。宿直トは殿居ト。主殿トは殿守トの略。

トハ 語根トハ 音義語 トの詰り窄まるにハの含みたるものム別るムを結びたるが苦ト。帳トは戸張トり。

トヒ 語根トヒ 音義語 トの詰り窄まるにヒの満ち足り廣がるを結びたるが極ト。鳶トは高く飛ぶより飛ビの意か。

トフ 語根トフ 音義語 トの詰り窄まるにハ行の活語を附けたるが問フ、トの強キに同上の活語を強めて働かせたるが飛ブ。

トホ 語根トホ 音義語 通ル、トの詰り窄まるにホの興り出で廣がるを結び、動くルの活語を付けたるが通ル。

トの詰りたるものを長く續くるに、ホの長く續くものゝ約まり集まるを結びたるが遠シ。樞は戸臍か。乏シはトモシの通轉か。

トマ 泊ルは止マル。苦はトバ。

トミ 富は富ムの名詞形、時間のトミは疾ミ、頓にと頓の字を使ふは音義の類似に依り借用したるか。

トム 語根トム 音義語 トの詰り窄まるに、締むるムの活語を付けたるが止ム。覓ム。富ム。

トモ 語根トモ 音義語 トの詰り窄まるにモの窄まりて一つに寄るを結びたるが、

友、供、共、軻。而して斯く一途に集中して、他意なき有様が乏シ。又同じく集中の意味から燈ス。

鱸は供に同じといふ。兎モ角モは『其モ斯克モ』の轉。

トヨ 語根トヨ 音義語 トの強きにヨの重るを結びたるが豊。勢ひ熾なる語意である。

動ムは豊ムに基づき、起り出で立ち騒ぐ意となる。

トラ 捕フルは取ルの延。

虎は朝鮮語ポーラムの轉にあらざるか。

トリ 鳥を音義語とすれば、トの早きにリの立ち上るものゝ動き落ち着かぬ意となる。併し鳥は捕ルより來りたるにはなきかと思ふ。或は朝鮮語タルキ(雞)より來るか。鳥居は支那語雞栖の意譯。但し我邦神社の鳥居に似たるものは鮮滿の社地にて見ることがある。

トル 語根トル 音義語 トの強きに引寄するルの活語を付けて取ルの語をなす。

トロ 語根トロ 音義語 泥、トの詰り窄まるにロの窄まりたるものゝ動き落ち着

かぬを結びて此の語をなす。トロトロなどはより出づる。

但し普通にはトを濁り強めていふ。

トヲ 語根トヲ 音義語 十、トの詰り窄まるにヲの長く続くものゝ約まり集まる

を結びて此の語をなす。

撓はタワワの通轉。

ナ行の部

ナ 語根ナ 音義語 ナ行第一段ナガラカに開く意、靡く象、物に添ひて現はるゝ象、物に添ふ意あり、此行概して柔軟なる意味を持つ。故に自然に粘着する象、弱き象、遲鈍なる意等を生ずる。

ナ の單音語、名、字は物に添ふ意、所謂『名は實の賓』といふに同じ。菜、魚は飯に添ふ副食物の意。汝は我に添ひて相向ふ意か。

ナカ 語根ナカ 音義語 ナに自ら続く意あり、カに固く別れ相向ふ象あり、ナカ(中) ナカバ(半、中端)の語是より生じたるか。而してカが濁りて再び続く意味を生じ、長となり流ル、となり、存ラフルとなり。乍ラとなる。ナカは中々に的中の意、後世轉じて不的中の意となる。即ちナカは左様が、ナカは左様でないとなつたのである。

ナク 語根ナク 音義語 泣ク、心弱き象のナを引き付けるクの活語に結びたるか、或はナゲク(歎)の略と見てもよい。

和グはヤハラグ意。慰ムは和グサシムルの約。

ナケ 歎クは長息の約。

ナサ 情は『成ス氣』か、氣は隠れて怪しき音義、ケンキ(氣色)ケンキ(怪シキ)

ケハヒ (氣合) ムツマジゲ (睦マジ氣) 等のケ、皆これである。

ナシ 音義語 無シのナは弱き意より來るか、シは助音。梨子は奈子の字音。

ナス 語根ナス 音義語 成ス。爲ス。濟ス。平穩に歸せしむるの意。従つて自ら

充足するの意をも生ずる。茄子は菜巢。形の鳥に似たるより來るか。巢は鳥を指すと
きに用ゐる。

ナセ 何故は何スレバの約。

ナリ 謎は何ソの約。

ナタ 語根ナタ 音義語 洋、ナのナガラカにタの連り開くを結ぶ。宥ムルも同じ
灘は支那にて河瀬の難所をさす。ナダの語には嵌らぬ。出雲地方にて今も内海をナダ
といふ。平穩なる意味である。上古大海をナガラカのものとして心得て、往來したる時代
の英氣を思ふべし。後世周防灘、播磨灘など、灘の字を用ゐるに至つたのは、海を恐
るゝ様になつた爲であらう。鉦は茶刀の略か。

ナツ 語根ナツ 音義語 撫ヅは柔ラカニ突キアタル意。懐ク懐カシキは撫ヅの内
外轉。ナヅム (煩、難) も弱キ意より來る。

夏は暑の轉。

ナト 坏は名共の略か。

ナナ 七、數名は別に出す。

斜は魚ノ目。

ナニ 語根ナニ 音義語 何、ナの物に添ふに、ニの添ひて力を入るゝを結ぶ。

ナハ 語根ナハ 音義語、繩、ナの物に添ふにハの含みたるものゝ分るゝを結ぶ。

ナヒ 靡クは和引ク、弱ク柔ラカなる形。

ナフ 綱フは繩の動詞化したるもの。

ナヘ 語根ナヘ 音義語 苗はナの柔和に、への送り出で廣がりやを結ぶ。萎、靡も
同じ。

並べはナラベの略、鍋は茶釜にて即ち副食物を煮る土器釜である。

ナホ 語根ナホ 音義語 直。尙。猶。ナのナガラカに開くに、ホの起り出で廣がるを結ぶ。正しく麗はしき象である。

直祓は直り合ひか。或は直りの延。等閑は直去り、乃至直退りの意か。

ナマ 語根ナマ 音義語 生、ナの柔ラカにマの曲ルを結ぶ。鈍ル、訛ル、鉛、ナマメク（婀娜）等皆是より來る。

海鼠は生蠶、形の似たるより。

ナミ 並、浪はナラビの略轉。

涙は泣水の略轉か。

ナム 語根ナム 音義語 嘗ム、ナの柔ラカをムの纏ムル活語に働かせたる。汝は汝貴。

ナメ 滑ラカは嘗メラカ、ラカは形容。並メは並べの轉。

ナヤ 語根ナユ 音義語 穩ス。惱ム。ナの柔にヤの怪しまるゝ象を結ぶ。共に弱き意を表はす。

ナユ 語根ナユ 音義語 萎ユ、ナ、ユ共に弱き意。

ナヨ 語根ナヨ 音義語 ナヨく、ナヨ竹。何れも弱き意。

ナラ 語根ナラ 音義語 ナのナガラカに開くに、ラの開きたるものを引き寄するを結びて、相似たるものが列り立つ意味を生ずる。並ブ。習フ。元と同じ。

ナル 語根ナル 音義語 ナの柔かに開くにルの終りを定ムルを結びて平均の意を生ずる。平均。馴ル。狎ル。皆同じ。平均は亦成就の意あり、生ル、化ル、成ル、就ルの語、是より來る。

鳴ルは泣クと共にナの物に添ふ音義より來る。即ち物の音聲である。

ナキ 地震、俚俗傳説に地震は地下に大魚あり、其が動揺する爲なりといふ。則ち魚居か。或はニユリ（土搖）の轉約か未詳。

ニ 語根ニ 音義語 ナ行第二段、柔らかに寄り付く象、濕ひありて充ち足る象、麗はしき象、添ひて力入る象、粘り付く象等あり、丹、土、荷、瓊、似、煮等の語、是等の意味より生ずる。

ニカ 膠ハカは煮皮ニカか。

苦しは或はイガシ（厳シの強メ）の轉か。

ニキ 語根ニキ 音義語 賑ニキヤカ、ニの麗しきに、キの清く立ち昇るを結ぶか。

握ニキルはニの粘り付くに、キの引キ付くるを結ぶ。

傍ニキも其の意か。幣ニキは和垂ニシテの約略。

ニク 憎ム

逃グ

ニコ 語根ニコ 音義語 ニの柔らかにコの親しきを結びて寛爾ヤカ、和ム等の語をなす。濁コルは土凝コル

ニシ 西は方位名に出す。

虹シは丹風シであらう。色彩ある風の意にて丹風シであらう。

ニセ 質ニセは似ニセ、似サシメの約。

ニナ 擔ニナフは荷ニナナフ。蜷ニナはミナを見よ。

ニハ 庭ニハは土場ニハ、俄ニハは庭假ニハか。

ニヒ 語根ニヒ 音義語 新ニヒ、ニの麗はしきにヒの充ち足り廣がるを結ぶか。

ニフ 語根ニフ 音義語 鈍ニフル、ニの柔らかに寄り付くに、フの合はするを強め結ぶ。

ニヘ 語根ニヘ 音義語 ニの柔らかに寄り付くに、ヘの添へ寄するを結ぶ。膠ニヘはへを強めて粘着の意。

ニホ 語根ニホ 音義語 匂ニホフ、ニの麗はしきに、ホの起り出で廣がるを結ぶ。フは活語。

ニラ 音義語 睨ム、ニの寄り付くにラの開けたるものを引き寄するを結びて凝視の意をなす。

又 ナ行第三段、下に寄る、物に添ふ、柔らかなる、親しき、濕ひある 付き了る自らなる等の音義あり、この行の父音としてすべて柔軟の意を掌る。

單音語、寢は柔かなる、下に寄る、着き了るなどの意。

又カ 糠、未詳

又キ 緯は貫キ。

又ク 語根ヌク 音義語 ヌの付き了るを、クの引き付くるに結ぶ。貫ク、抜ク、脱グ、拭フ等是より來る。

又サ 音義語 幣、柔細の意或は埃乃語としてもよい。

又シ 主は名大人か、乃至汝大人の約か。

又ス 盗ムは鼠が物を盗むより來る。即ちネスミの轉用か。

ヌノ 語根ヌノ 音義語 布、ヌに平なる意あり、ノに長く續くる象あり、相結んで布の語をなす。

ヌフ 語根ヌフ 音義語 縫フ、ヌの物に添ふをフの合はする活語に働かせたる。

ヌマ 音義語 沼、濕ひあるヌに間のマを結ぶか。

ヌメ 音義語 糲、柔軟平滑の意。滑ルはその動詞形。

ヌラ ヌラ は柔軟連續の意。

ヌル 語根ヌル 音義語 塗ル、ヌの柔濕の意を流轉のルの活語に働かせたる。

ネ 語根ネ 音義語 ナ行第四段、和らかに送り出す象、又安定する意、主となる象あり、根、音、是等より來る。嶺はミネの略。

ネカ 願フはネグ(祈)の延。

ネキ 禰宜は神祈人の略。祈ギであらう。葱は根葱。

ネク 語根ネク 音義語 祈グ、ネの主たる意にクの引き付くるを結ぶ。思ふ如く

にならしめんとの意。

ネコ 音響語 猫、古くネコマと呼んだのはネヨウと啼く猫の意であらう。ネコはその略。俗間今も獅子を獅子猫といふ語がある。

ネズ 鼠は屋根棲の略か。

ネタ

ネハ 粘ルは土張ル、又は根張ル。

ネヒ 長生は根張の約か。

ネフ 舐ル、右等は根の粘着性を合はするフの活語に働かせたるが、漸次變形したのであらう。眠ルはネムルに同じ。

ネム 眠ルは寐ムル、ネのナガラカなるに、ムの締むる意を結ぶ音義語。

ネラ 音義語 狙フ、ネの添ひ寄るにラの開けたるものを引き寄るを結ぶ。

ネル 語根ネル 音義語 練ル、ネの添ひ寄るを移るルの活語に働かす。

ノ 語根ノ 音義語 ナ行第五段。柔軟なるもの、降りて終に復た昇る象あり、長く續く意を含む。野、籠等是より來る。

ノカ 遁ルは退カル。

ノキ 軒。未詳

ノク 音義語 退ク、ノの下に寄るを引き付くるクに結ぶ。

ノコ 残ルは退カルの内外轉か。

拭フはヌグフの通轉。

ノシ 熨斗は伸シ、伸シは伸バシの略。

ノス 戴スは昇スの略。伸スは伸バスの略。

ノリ 語根ノソ 音義語 物に添ひ窄まるノにソの迫り窄まるを結びて、物を注視する望ムとなり、物を注視する意は内轉して欲求の望ミとなり、更に外轉して窺ク覗クとなる。又ノの下に寄る意にソムク、ソクルのソを結びて除クの語をなす。

ノタ 宣フは宣リ給フ。

ノト 語根ノト 音義語 長閑、ノの平らかに長く續くにトの詰り窄まる定着の象を結びて平穩の意をなす。

喉は更にトを強めたる意、咽喉粘膜の柔軟なるに取る。又長閑の力は形容。

ノノ 罵ルは喃々と口喧しく言ふ意より來るか。

ノフ 語根ノフ 音義語 延ブ、ノの長く續くに合はするフを結ぶ。

ノホ 語根ノホ 音義語 昇ル、ノの長く續くにホの起り出で、廣がるを結ぶ。

ノミ 音義語 鑿、蚤は助語のノミと同じく集中の意より來る。喉は吞戸との説あ

れどもノドの音義が元で、ノミドは後に宛てた語であらう。

ノム 語根ノム 音義語 吞ム、ノの柔かなるに締むるムを結ぶ。

ノリ 則は宣りが法則となれるより來るか、祝詞は宣リ言。宣リ説キとの説は未だし。

糊はノロキ（鈍）の約か。

ノル 乘ルは昇ルの略か。宣ルはのの長く續く又は物に添ひ窄まる音義より來る。物言ふ意。

ノロ 語根ノロ 音義語 鈍シ、ノの下に續くに、ロの窄まりて内の空しき、又落ち着かぬ意あるを結ぶ。呪詛フは宣ルの延、且つ内轉したるか。

狼烟は宣ル火ではあるまいか。火で合圖をして物をいふとの意味で。

ハ行の部

ハ 語根ハ 音義語 ハ行第一段。ハに含みたるものゝ分るゝ象、廣がる意あり、この行は概して分派するの意を含む。但しフに和合の意味あり、和らかに合はする活語となる。

ハの單音語、齒、葉、双、端、羽、場、皆分派の意を持つ音義語である。

ハカ 語根ハカ 音義語 田の或る面積の義。田植、稻刈等のときに一ハカ二ハカと數ふる。蓋しハの分派にカの別れ相向に、即ち位置(處)の意を結ぶか。而して是が動詞化して計ルとなり、更に名詞化して衝となる。抄ルはハカ取ル、墓は其區域の廣さをいふより來るか。ハカナシは測り無シ。袴は穿ク裳。馬鹿はボカ(温氣の蒸騰する形容)の通轉か。

ハク 語根ハク 音義語 ハの含みたるもの分るゝ意を、クの引き付くるに結ぶ。吐ク、掃ク、穿ク、帶ク、皆此の意に基づく。剝グ、矧グはその強メ。育ムハ羽含ム。吐クは又音響語、吐く音。

ハケ 刷子は掃キ毛か。

ハコ 語根ハコ 音義語 箱、ハの含みたるもの分るゝにコの籠むるを結ぶ。運ブは箱を用ゐるより來る箱ブの意か。さては抄ブの轉か。

ハサ 挟ムは端挟ム、又は箸ムの轉。ハザマは端狭間。

ハシ 語根ハシ 音義語 端、ハは分派、シは迫り寄り付く意、先づ物の端を呼ぶ語をなし、橋は路の端なる故に同じくハシと呼び、箸は木竹の端を用ゐる故に、同じくハシと呼ぶ。

ハシ の音義を動詞に移したのが走ル。並び續くらを添へたのが柱。

『箸折鏡の兄弟』といふ元は、古へは木の枝を折り曲げて鏡の如くし、以て箸となしたり、故に『箸折り届めの兄弟』の意にて末は二本と別れてあれど、本は一本なりとの意なりとの舊説もある。

ハス 蓮は蜂窩の略。斜に切るをハスニ切ルといふは蓮を切りたる形より來る。

ハタ 語根ハタ 音響語 旗、機、旗の風になぶらるゝ音、働ク、(旗ラク)責ル(旗ル)等是より來る。機も亦その音に取る、

叩は叩クの轉。

ハタ 語根ハタ 音義語 肌はハの分派に、タの平開を強め結ぶ。將は又の、畑は

乾田或は火田の通轉。端、鱧何れも平に廣き意より來る。

ハチ 音響語 蜂、蜂の羽音パチ／＼と聞こゆるに取れるか。蓮は蜂窩。

ハツ 語根ハツ 音義語 果ツ、泊ツ、ハの分派を詰るツにて定着する。果ツが濁りて行き過ぎ、ラ行に働きて外ルル。初は端のハを數のツに結ぶ。僅は葉束にて少キの意か。

初カシキ、ウヒ／＼シキ、初心な有様より來りたるにてはあらざるか。その初カシキの形容詞が更に動詞化して耻ヅ、耻ヅルトなり、再び名詞化してハヂとなりたるものか。

ハテ 果テは果ツの名詞形。俗語ハテナの、ハテはサテ（然アリテの約）の通轉か。派手は端手。

ハト 音響語 鳩は其の鳴く聲、ハトツポ／＼より。波止は泊場の轉か。

ハナ 語根ハナ 音義語 花、含みたるものゝ分るゝハに、物に添ふナを結ぶ。直

に花の意と解することが出來よう。鼻、端、同原。甚、酷は花々の通轉。極めて顯著なるの意。放ツ、離ルルは花ツ、花ルル、放ツはツに突き當る象あり、離ルルはルルに流轉の意がある。

餞は人の旅立つとき見送る人が好餌を以て馬の鼻を導き向けたるに始まる。故に『馬の鼻向』といふたのが、やがて上部を略されたのである。

ハニ 埴、丹土は美はしき土の意。

ハヌ 語根ハヌ 音義語 跳ヌル、ハの分派にヌの下に寄るを結ぶ。排斥の意。

ハネ 羽根は字の通り。

ハハ 語根ハハ 音義語 母、分派の意より來るか、體が二つに分れたるものなる故に。

或は音響語にてパパに基づけるか。嬰兒が唇頭に手を觸れ、上下して發音するときパパといふ。この發音を屢とするより、常に最も近接する女親を呼ぶ語となりたるに

はあらざるか。

英語に父を *pa pa* といふは蓋し中古以後の外來語と覺しく、英語は之を佛語に借り、佛語は拉丁語、拉丁語は希臘語に借りたるにて、其の元は *patēr* 即ち法主、師父のことから來たのであるが、師父を何故に *pa pa* といひ、*po po* といふかの、眞の語原は分つて居ない。然るに別に *pap* といふ語あるが、是は乳房のことにて、歐洲諸國概ね同じく、而して其の語原は、嬰兒が食物に向つて呼ぶ聲（即ち食を求むる聲）とある。是は寧ろ徹底したる見方で邦語の母を *pa pa* の音響語と見るのと同様である。

尙朝鮮語に飯を *pa* といふも齊しく自然の發音に基づきたるものであらう。何れにしても邦語の *pa* が條理整然たる點に於て、優つて居る様である。

pa は掃はくと同じ。巾はは端場、憚はは巾はカルにて膨脹の意か。其が反りて恐怖とされるか。或は掃はカルにて斥けらるゝ意か。

パバ（祖母）は *pa pa* を強めたもの。

ハヒ 蔓はルは這はヒ廣はゴルの約。

ハフ 語根 *ha* 音義語 這はフ、*fu*、共に廣がる意あり、取締なき形より來る。溢はル、放はル、屠はル、皆同じ。葬はル、葬はムルは嵌はムルの轉、壙は穴に嵌はむるの意から來たのであらう。蝮はハミを見よ。

ハヘ 音義語 延はヘ、*he* の分派に、*he* の送り出で廣がるを結ぶ。蠅はは朝鮮語の *he* と同語、蠅はは彼方が本家であらう。侍はルは這はヒ居はル、貴人に從はひ仕ふる形。

ハマ 濱はは端間が海河の邊をいふ語。

ハミ 蝮はは蝮蛇の一名反鼻はより來る。

ハム 食はムは齒はム。*mu* は引キ詰むる、締むる意。嵌はルも食はムより來る。口に入れたる如く適合する意。

ハモ 鱧は食魚の約轉といふは如何。

ハヤ 語根 *ha* 音義語 早は、*ya* の分れ廣がるに、*ya* の怪まるゝ象、乃至 *ya* と掛聲

をする程の意を結ぶ。

林は、生シ、囀スは榮ス、行ルは榮ル、又は早ル。

ハユ 語根ハユ 音義語 ハの廣がるにユの湧き出づるを結びて映ユ、生ユ、榮ユ、等の語をなす。

ハラ 語根ハラ 音義語 原、腹、ハの廣がるにラの列り開く意を結ぶ。感詞のハラ／＼亦同じ。祓フ拂フは原フ。胎ムは腹ム。フの活語は軽く、ムの活語は重い點など玩味すべきである。

散グは原ラクに同じ意。

ハエ 鮓はその舉動の早きより。

ハリ 針はハの分派にリの引き寄するを結びたる音義語か。梁は張ルの名詞形。

ハル 語根ハル 音義語 ハの含みたるものゝ別るゝ象、廣がる象に、ルの移る意或は引き寄する意を結びて、張ル、晴ルル、春、墾ル、脹ルル等の語をなす。

ハレ 音義語 感詞、含みたるものゝ分るゝ、廣がるのハに指すレを結ぶ。

ヒ 語根ヒ 音義語 ハ行第二段、充ち足り廣がる、力入れて張り出す等、頗る貴き意を持つ。日、火、靈、等で味ひ知るべきである。樋は充ち足り廣がるの意、梭は力入れて張り出す、氷も同じか。

ヒイ 秀は日出デ。

ヒカ 語根ヒカ 音義語 光、ヒの充廣にカの鮮耀を結ぶ。輝り、光り。東は方位名に出す。

僻ム僻目はヒカのカを濁りて強め行き過ぎたる意より來るか。或は少目、眇の轉か。ヒキ 蛾蟊は引キ蛙(蛙は歸ル) 率キは引キ居、氷木は茅木の通轉。又匹をヒキと讀むは支那にて鴨一番をボク(鶯に同じ)といふより轉じ來れるか。引キなりとの舊説は取らず。

ヒク 語根ヒク 音義語 引ク、引き付くるクの活語に働かせたる。ヒキシ、ヒク

(低) は引クに退くの意あるより轉じ來れるか。

ヒケ 鬚髯は低毛か、上毛(髮)の高きに對していへるか。

ヒコ 語根ヒコ 音義語 彦、孫、は日子の意。獲は引摺ルの延。

ヒサ 語根ヒサ 音義語 久、ヒの充足廣にサの細長き意を結ぶ。鬻グは商品を掲

げたるより來る。膝は音義語、ヒの力入れて張出すにサの迫り相向ふを強め結ぶ。籠

は提籠、提グは引キサゲ。柄杓は瓢の轉。ヒザカキは似神の轉か。

ヒシ 語根ヒシ 音義語 ヒシ、ヒの力入れて張り出すにシの迫り寄り付くを

結ぶ。そのシを濁り強めて挫ク或は挫グ。

菱は挫ゲタル形をいふか。醬は干鹽。聖は日知りとの説あり、寧ろ靈知りと見ては

どうか。

ヒリ 語根ヒリ 音義語 ヒリ、竊、潜ム、攀ム、ソに迫り窄まる意あり、ヒ

の充足廣にソムキ(背向)て迫り窄まる象より來るか。尙ヒシに關係がある。

ヒタ 語根ヒタ 音義語 直、純、常、ヒの充足廣にタの連り開くを結ぶ。曲折左

右せざるの意、只管、頓はその活用。

育スは直ク在ラシムルの意か。或は浸スの内轉か。

浸スはヒダス(濡サス)の通轉にてはあらざるか。

額はヒタ(直)と眞體に向ひたるヒタヒガミ(直ヒ髮)の意ではあるまいか。

左は身垂の通轉と思ふ。

ヒチ 語根ヒチ 音義語 弦はヒの力入れて張り出すに、チの強く力入るを結ぶ。

泥はヒの充足廣にチの詰り充ちたるを結ぶ。

ヒツ 語根ヒツ 音義語 櫃、ヒの充足廣にツの詰るを結ぶか。柩は櫃城、或は櫃

木か。

濡ヅは泥の濕ひあるより分化し來れるか。

莠は恐らくヒツジョネ(引繼米)乃至ヒツジイネ(引繼稻)であらう。

羊は『似ツ牛』即ち似タル牛の約轉と思ふ。ニをミと通するは、ニムナのミマナ(任那)ニムブのミブ(壬生) 蕪、蜷のミラ、ミナ等にて分る。さうしてミとヒとは元と殆んど同音であるから、似ツ牛が羊となること困難でない。尙ヒザカキ(似神)の例参照。

ヒト 語根ヒト 音義語 人、ヒの充足廣に、トの詰り窄まる、即ち限定、定着の象を結ぶ、日止、又靈止の意にて、自ら尊貴の心を表はす。一ツ、獨りは數詞を見よ。ヒドイ(酷)はイタイ(痛)の轉。或は非道の俗語化か。

ヒナ 夷、鄙、は隔の轉との説あり。或は日無の意ではあるまいか、天サカルヒナなどの語を思へば。

雛はヒヨ鳴キの略であらう。

ヒネ 音義語 拈ル、ヒネの強き意を移るルの活語に働かする。

ヒハ 音響語 雲雀、その鳴く聲に取る。

ヒビ 音義語 力入れて張り出す、強き意を重ねる、沖ル、響ク、柁。

輝は皮膚のヒ、ラクといふ意より來る。

ヒマ 間、隙は日間と同じ。

ヒメ 媛は日女、秘メは潜メの略。

ヒモ 語根ヒモ 音義語 紐、ヒの強きにモの窄まりて一つに寄るを結ぶ。引き寄する意あり。引裳と通ふ。神籬は靈降樹の約轉、又神降樹に通じ三諸、御諸に轉す。

ヒユ 語根ヒユ 音義語 冷ユ、日のヒを弛むユに結ぶ。

ヒエ 音響語 鴨、その鳴く聲。

ヒラ 語根ヒラ 音義語 平、ヒの充足廣に、ラの連るを結ぶ。開クは其の動詞化。

ヒリ 拾フはヒロフの通轉か。

ヒル 晝は日ル、日を時間の意となすときに、夜にルを添へて夜ルとなすと同じく、ルを添へたのであらう。或は日沖ルの意にて沖ルか。

簸ル、屎放ル、屁放ル、はヒの力入れて張り出す音義より來るか。虫の名の蛭も同義であらう。蛾は卵種を放り出すよりいふか。
 怯ムは蛭が恐るゝとき縮み屈む形より再轉したるか。乾ルは日ル、火ルにて日、火の動詞化。

ヒレ 語根ヒレ 音義語 ヒの充足廣にレの掲ぐるを結ぶ。廣き意味。領巾、鱗。
 ヒレフスは平に伏スの約。
 ヒロ 語根ヒロ 音義語 廣、ヒの充足廣に、ロの内の空しきを結ぶ。弘ム、廣グ
 ルはその動詞化。

拾フは下に在る物を取るとき手を廣ぐるより來りたるにはあらざるか。

フ 語根フ 音義語 八行第三段。合はする、含む、膨るゝ、張り出る、廣がる等の意あり、單音語としては經の一あるを見る。經は含むの音義より來るか。

フカ 語根フカ 音義語 深、フの含ムに自ら深き意あり、尙之にカの高きを結ぶ。

フキ 露は拭キ草ではあるまいか、葉を以て何かを拭きたることはなきか。或は吹キ出ヅルに取れるか。古名フブキ。
 フク 語根フク 音義語 含ム、袋、茸、膨ルル等のフクはフの含むに、クの引き付くるを結ぶ。

匏は膨、陰囊はフクレの轉か。
 耽ル、更は深クナルの意。

フク 音響語 吹ク、フと吹クときに必ず發する音。又拭クは吹キ拂ヒ清ムルより來れるにてはあらざるか。

フケ 耽ルはフクルに在り。

フコ 畚は袋籠といふに同じか。

フサ 語根フサ 音義語 總、フの合はするにサの細別を結びたるが總。其が活動して統ヌ、攝ヌとなり、應フとなり、塞グとなる。フ、ヌ、クの活語に輕重強弱の差

あるに注意すべきである。

フシ 語根フシ 音義語 節はフの張り出づるにシの迫り寄り付くを結ぶ。柴はフの同上にシの細長く立昇るを結ぶ。

フス 語根フス 音義語 伏ス、フの廣がるに、スの沈み下るを結ぶ。燻ルは伏ス火ルの轉か。

衾は臥裳の通轉。

フセ 語根フセ 音義語 防グ、フの合はするにセの迫るを結ぶ。

フタ 語根フタ 音義語 蓋、フの合はするにタの連り開くを結ぶ。塞グは蓋グ、札は文板と云ふ。

フチ 語根フチ 音義語 淵、フの深きにチの詰り充ちたるを結ぶ。

藤はフの廣がるに、チの連るを結ぶか。

フツ 語根フツ 音響語 フツと斷ち切る音、依つて刀をフツと呼んだ。

フテ 外來語 筆の音、朝鮮にてプチといふ。フデは其の轉、フンデは音便にて延べたのであらう。文手又文出などいふは傳會か。

フト 語根フト 音義語 太、フの張り出るにトの強きを結ぶ。

フナ 鮒、は鮒魚の湯桶讀み。

フネ 語根フネ 音義語 舟、フの張り出る、廣がるにネのナガラカなるを結んだのであらう。圓滑に進行する形容から取つたものと思はる。(或は波のウネのウネの通轉か。)支那字の舟はその象形であるが、字音のシフは航進する音であらう。歐羅巴諸國語の舟をシツプ、或はシフ、シイフなどと呼ぶ語原は明かになつて居らぬが、何れも舟の行く音から取つたのであらう。我が民族は最も古くから舟に親しんだものであるから、張り出づる、ナガラカなるの音を以て呼び初めたること尤もと思はる。洋をナガラカのナダと稱へたと合はせて、海國男子の味はふべきところであらう。又フネはウクネ(浮根)の略轉と見ることも出来る。

フノ 布海苔 布に付ける海苔の意で、湯桶讀みか。

フフ 踏はフキに在り。

フミ 書は含ミの略ちふ舊説あれど、文の字音ブンの和フニの通轉であらう。簡は文板。

フム 語根フム 音義語 踏、フの合はするを、縮むるムに働かする。

フモ 麓は踏元か。

フユ 語根フユ 音義語 殖ユ、フの膨るゝ張り出づるにユの湧き出づるを結ぶ。

冬はヒユ（冷ユ）の通轉。冬は殖ユなり、物を藏して増殖の準備を爲す故にとの舊説あれども穿鑿に過ぎたり。上古の語としては入念過ぎる。四時の名を案するに、春は張ルなり、晴なり、夏は暑なり、秋は明なり、皆その有様を在るが如くそのままに、打ち付けに名づけたる例にてあれば、則ち冬は殖ユにあらで、冷ユなりと思ふ。春、晴、秋明、夏暑、冬冷、よく相類同し、相對立するではないか。

フエ 音響語 笛、其の鳴る音。

フリ 態は振。

フル 語根フル 音義語 振ルはフの張り出づるにルの動き落着かぬ象、移る意を結ぶ。更に之を語根として震フ、飾フ、觸ル等の語をなす。降ルも振ルと元と同じ意。舊は經ル。

へ 語根へ 音義語 ハ行第四段。送り出で廣がる、平に廣がる、薄くなる、添へ寄する等の意あり。瓮、邊は平に廣がる意、戸、重、舳は添へ寄する意。尻は送り出で廣がる意。經、歷、は經りの約轉。齋部、忌部、祝部、糸部、部屋などのへは添へ寄するの意、戸、重と元と同根か。

へキ 折ギは折グの名詞形。

へク 語根へク 音義語 折グ、薄くなすの意。

へコ 九州にて男禪をへコと呼び、薩摩にて壯男をへコといふ。依りて男子のシゴ

キをヘコオビ（兵兒帶）と呼び、各地に通用す。思ふにヘコはヒコ（彦）即ち男子の稱にて、通轉してヘコとなりたるにはあらざるか。兵兒の文字は無論近世の宛字。籟は地球語ともいふ。

ヘス 減スは減ラスの略。

ヘリ 臍はホソの轉か。

卷子は重麻。

ヘタ 河海の岸近き處をヘタといふは邊手の意。下手をヘタといふも同じか。沖、奥に對する淺き意である。

下手は或はウハテ（上手）に對するシタテの轉略にて、シタがヒタとなり、やがてヘタと轉じたものと見ることも出來よう。隔ツは戸立つ。

ヘツ 邊藻草は邊手に生ずる海藻、ツはノの意。

削ルは削ルの轉か、詔フのへは添へ寄する迎合の意か。ツラフは活語。

ヘニ 紅は丹士の轉。

ヘヒ 蛇はヘミの轉。

ヘミ 虺は這ヒ虫の約。

ヘラ 篋はヒラ（平）の轉か。平はその形より。篋棒は篋を棒といふなりとの説は非、ノメラコ、ナメラコ（滑々子）の轉であらう。

ヘリ 縁は邊りの意。

ヘル 語根ヘル 音義語 減、への薄くなるに移るルを働かする。

ホ 語根ホ 音義語 ハ行第五段。窄まり含む意、起り出で廣がる意あり、前者は執着となり、後者は讚美となる。

穂、火、秀、帆、頰、皆後者の意。

ホイ 乞丐をホイトといふは、後記ホガヒビト（視ヒ人）の略か。乞人の約轉と見ることとも出来る。

ホカ 語根ホカ 音義語 外はホの起り出で廣がるにカの別れ相向ふを結ぶ。朗ホウラカはホの同上に、カの清く鮮かなるを結ぶ。ラカは形容。

孔を穿つことをホガスといふは穿ウツの轉か、乃至ホゴス（毀）の轉であらう。ボカス。は色の濃淡の移りゆく曖昧の形、ボカくは温氣の蒸騰する意。祝ホガヒは祝ホギの延。

乞丐をホガヒビトといふは穗乞ホコヒ人との説もあれど、祝ホガヒ人であらう。其は乞丐が祝言を白して物を乞ひたる故かと思はるゝ。行器ホカキは外居ホカキ。

ホク 語根ホク 音義語 祝ホガグ、ホの起り出で廣がるを引き付くるクに働かする。ホクく、ホクソエミなども同根か。

黒子ホグロはハハクソの約といふ。ハハクソは母草ハハクサの轉。

ホケ 木瓜ホケはその花の色よりいへるか。

ホコ 語根ホコ 音義語 矛ホコはホの窄まり含むに、コの引き付け窄るを結ぶ。誇ホコルはホの起り出で廣がるにココの引き付け窄むるを結ぶ。ルは移る意の活語。綻ホコロビ、埃ホコリは

その内外轉か。

祠ホクラは神庫ホクラの轉といふは取らず。祝坐ホケクラ（又は祝庫）の略轉であらう。

ホサ 音義語 祝ホサク ホの起り出で廣がるにサの鋭く現はるゝを結ぶ。

ホシ 星は起り出で廣がるのホに細長く立昇るのシを結びたる音義語か。

欲ホシキはホリシキ。

ホス 乾ホススは火爲ホス。

ホリ 語根ホソ 音義語 細ホリ、臍ホリ、ホの窄まり含むにソの迫り窄まるを結ぶ。

ホタ 語根ホタ 音義語 絆ホタス、ホの窄まり含むにタの上に付くを強め結ぶ。螢ホタルは

火垂ホタル。

ホテ 炎ホテルは火照ホテル。

ホト 語根ホト 音義語 ホの窄まり含む、トの詰り窄まる、共に物事を限定する意あり、邊ホトりは其の際をさし、程ホトは其の度合ひを示す。陰ホトは其の限られたる處、所謂

局部といふと同じ意味合ひであらう。或はホソ（細、臍）の轉か、頬戸との舊説もある。

殆どは程々、施スは程越スにて少し溢れしめ、被らしむるの意あり、被ルも其の意、逆ルも亦同じ。

ホネ 語根ホネ 音義語 骨、ホの窄まり含むにネの主となる意を結ぶ。

ホノ 語根ホノ 音義語 仄、ホノく、ホの窄まり含むにノの物に添ひ窄まるを結ぶ、么微の意。

ホソ 語根ホソ 音義語 細、ホソの形を延べてリの形容を付けたる語。

ホフ 語根ホフ 音義語 覆、ホフはハフルに同じ。

ホホ 語根ホホ 音義語 頬、ホホはホを見よ。

ホム 語根ホム 音義語 起、ホの起り出で廣がる讚美の意を縮むるムに働かす。

ホヤ 語根ホヤ 音義語 宿木、海鼠は宿木の生ずる處に、その表皮の形の似たるより名つくるといふ。

ホユ 語根ホユ 音義語 吼、ホの起り出で廣がるにユの湧くを結ぶ。

ホラ 語根ホラ 音義語 洞、螺、ホの窄まり含むに、ラの開けたるものを引き寄するを結ぶ。

ホリ 語根ホリ 音義語 堀、ホリは堀ルの名詞形。

ホル 語根ホル 音義語 掘、ホの窄まり含むを引き寄するルに結ぶ。惚ル、欲ル同根にして、何れも一點に集注するの意。

ホルル 語根ホルル 音義語 老耄は掘ル、正氣を掘り去らるゝ意より來るか。

ホロ 語根ホロ 音義語 母衣、ホの窄まり含むに、ロの窄まりて内の空しきを結ぶ。

ボロくはホの窄まるに、ロの動き落ち着かぬを結びたるか。脆キも其の意義であらう。乞食僧をボロくといへるも其の衣服の様より來るか、梵論々々の舊説は如何であらうか。

マ 行の部

マ 語根マ 音義語 マ行第一段 相向ひたるものを引き寄する、相向ふ、圓き等の象あり、此の行概して圓滿の意を持つ。

さてマの單音語、眞は圓滿具足の意。

間は相向ふ、距離のある意。目はメの通轉。

マカ マカに屬する語は、多く第二次第三次の語である。即ち退ル、罷ルは目枯ル。任スは捲カスル。紛フ、擬フは目更フ、賄フは任ナフ、婢は賄立、或は中立の轉。曲ルは捲カル、或は目枯ルの強メ。

マキ 牧は舊説馬城なりといふ。併し案ずるに牧は求ギ場か、畜類をあさり求むるところより來るか。或は牧の字音か。我邦上古牧畜の俗なし。野獸は之を『求キ狩リ』(後世頼朝富士のマキ狩亦、自ら此の意に合ふ)牛馬は之を舍に飼うたところより

察すれば、牧の語原は、恐らく右の二案の中ではあるまいか。薪は竈木の略。

マク 語根マク 音義語 捲ク、マの相向ひたるものを引き寄する、クの引き付くるに結ぶ。共に或るものを捲クの意を表はす。是が枕となり、求グとなり、曲グとなり、負クル(捲カル、の意)となる。

時クは音義にては説きがたし。恐らくはハク(吐ク、掃ク)の通轉か。或はいふ間配りの略と。

マコ 孫はウマゴの略、ウマゴは可美子、子よりも愛するといふより來るか。或は自ら『産マヌ子』の謂ひか。

誠は眞事、眞言共に同じ。

マサ 語根マサ 音義語 正、マの圓滿にサの細密を結ぶ。完全にして隙間の無き、無缺の意。

將ニは屹と左様であらうと確信するの意。マサカは正耶、正か否かを疑ふの意。マ

ザ／＼は正の強メ。弄ルはは間探ルといふ。優ルは増サル、

マシ 語根マシ 音義語 交フ、マの相向ひたるものを引き寄するに、シの迫り寄り付くを強め結びて合はするフの活語を付けたる。

禁厭は交フの内外轉か。眞面目は眞締の意。

マス 語根マス 音義語 増ス、マの相向ひたるものを引き寄するより加ふる意に取る。スは進む意の活語。樹、鱒は増スの意より來るか。

壯夫は優ル男の轉か。

マセ 柵は間狭。

マタ 語根マタ 音義語 又、マの相向ふにタの連り開くを結ぶ。股、跨グ、同じ意。

全クは又クといふに同根ながら、是も彼もと合はせて圓滿の意となるマに、連り開くのタを結びて、更に引き付くるクに働かせたのである。

奉スは全ス。早は未ダ來、乃至は間無キ。

斑は間垂か。

マチ 語根マチ 音義語 町、相向ひたるものを引き寄するマに、詰り充ちたるチを結ぶ。町、區、襦、襦、同じ意。

マツ 語根マツ 音義語 相向ひたるものを引き寄するマに、詰る、連るツを結び、好もしい懇ろなる意味を生ずる。待ツ、祭ル、順ル、政ル、先ヅ等皆是より來る。貧シは富の止ムに對する「未ダシ」の意か。或は惑シの轉か。慕然は「捲クシングラ」クラは繰ル、又は座で強める助音であらう。

マテ 迄は助語を見よ。蟻は馬刀貝の字音。

マト 語根マト 音義語 的はマの相向ふにトの詰り窄まる、即ち、集中の意を結ぶ。

纏フは相向ひたるものを引き寄するマに、同前のトを結びて、合はするフの活語を

付くる。

惑フは間問フか。窓は間戸。假睡ムは目鈍ム。

マナ 語根マナ 音義語 學ブ、マの相向ひたるものを引き寄するにナの物に添ひて現はるゝを結ぶ。眞似ブも同じ意。

魚は眞菜、上等の副食物といふ意。

狙は魚板、マナ箸は魚箸、眼は『目ノ子』

マニ 音義語 任、隨、マの相向ひたるものを引き寄するに、ニの柔らかに寄り添

ふを結べば、自ら調和一致して逆らはず、彼に任ずるといふ意味が生ずる。マニマ、

ママ(儘) 共にマニくの略。占は神意のマニくといふ心より來るか。

マネ 眞似は學ブの通轉、但し眞似の字義と同じと見てもよい。

マハ 語根マフ 音義語 廻ル、は舞フの内外轉。

マヒ 賄フは、マカナフ(賄)の内外轉ではあるまいか。

マフ 語根マフ 音義語 舞フ、マの圓きを合はするフに働かする。又廻ハルと相通ふ。

通ふ。

マヘ 前は目方、即ち目のある方、尻方の反對。

マホ 幻は目脆シ。

ママ 儘は任々の略。間は間々。

飯、乳はウマくの約、嬰兒が食を求むる語。

茲に乳をママといふ。英、佛、西、蘭、獨、伊の語にて母をmama.mamma.或はmaman

といふは、嬰兒が母を呼ぶ聲とのみあつて、其の語原は分つて居らぬが邦語ママの元

たるウマは、ウの開始にマの圓滿を結びたるにて讚美の意あり、生む、生まるゝと相

通ふ語で、意味頗る深長である。

繼母は乳母との舊説あれどママシキなどの語もあるより見れば是は間母で、親密な

らざる、隔てある意味であらう。

マミ 語根マミ 音義語 塗ル、マの圓きにミの充ちて一つに寄るを結ぶ。
マム 蝮はハミムシの轉略か。ハミを見よ。

マメ 語根マメ 音義語 豆、マの圓きにメの育て養ふ意、廣がるものの苔みたる象を結ぶ。圓滿にして力あるもの、壯健、忠實皆この意より來る。

マモ 守ルは目守ル。モに窄まりて一つに寄る集中の意がある。

マユ 眉は目負フ、或は目覆フの約轉か。又目上の轉。

マヨ 迷フ、は間ヨフ、ヨフは漂ひ定らざる形容。

マリ 鞠は圓キの約。

マル 圓に同じ。

マレ 稀は間有りの約轉か。

マロ 語根マロ 音義語 圓、マに固より圓き意あり之に窄まりて内の空しき口を結ぶ。

自己を磨と呼ぶは諸説あれども未だし。

マキ 參ルは前居ル、前に在る意。「御前に候ふ」などの如く。

マヲ 申スは前食ス、貴人の前に仕ふる意。

ミ 語根ミ 音義語 マ行第二段。充ち足り一つに寄るの象あり、充實、集中、統一の意。身、實、の單音語之を表はす。御は充の意味を取りたる美稱。見は目より來る、メ、ミの通轉。

ミカ 嚴はイカ(嚴)の轉。麤は御瓮。磨クは身耀カス、或は見耀クの約轉。

ミキ 幹は身木。砌は水切りか。汀は水際。右は身上りの約轉、尙方位名を見よ。

ミサ 操は身徳の約。

山陵は御小城かといふ。

雉鳩は水探ともいふ、海鷓鴣にてはなきか。

ミシ 短シは、ミの充足にシの沈み下るを結びたる音義語か。

ミリ 味噌はヒシホの轉。字は借字、尙衣食住の章參看。身潔は身滌ギ。雲は水外レか。

ミタ 猥り、亂ルは目垂ル、正視すべからざる形。

ミチ 道は御路。

ミツ 語根ミツ 音義語 充ツ、滿ツ、ミに自ら充滿の義あり、其に強キツを結ぶ。水は充ツの強メ、其の充ちわたる形より。瑞は水より内轉したる美稱。貢、調は御

續ギ。

魁魁は虫之靈。蔓は身鬢。

三ツは數名を見よ。

ミテ 幣は御手庫、御手庫は御寶と同じか。

ミト 緑は芽出色の約轉か。英語 Green (綠) に發芽の義あると同じ意味合ひ。

ミナ 音義語 皆、ミの充ち足るにナの物に添ふを結ぶ。蜷は實魚か。

ミネ 嶺は棟の轉か、其の高き意より。

ミノ 實ルは實成ル。

ミミ 耳は御身蔓の略か。蚯蚓は目見ズ。

ミヤ 宮は御屋、都は宮所。造は宮之子。

ミヲ 滌は水尾又は水緒。

ム マ行第三段 引き詰むる、一つに寄る、締むる、捲く、然せんと思ふ等の音義あり。

單音語は無し。

ムカ 向フは向クの延。

昔は向ヒシ。時といふ意か。今も『向フル月』などいふに合せ考ふべきである。

ムキ 麥は其の字音、朝鮮にてメクといふより取れるか。

ムク 語根ムク 音義語 ムの一つに寄るにクの引き付くるを結びて、向ク、茂ク、

茂クツケシ、等の語をなす。

報ユは相對する意にて向フルの分化か。

剝クはメク（剝）の轉か。

ムコ 婿は迎へ子かともいふ。

ムサ 茂は身狭、世にいふムサクルシの語原。故に貪ルは「茂サ欲ル」の意。

ムシ 虫は蒸シカ。薙は身代、身の下に敷く代。寧は若シロか、相似たるものを指す意。

す意。

ムス 語根ムス 音義語 蒸ス、生ス、ムの一つに寄るに、スの突き出すを結ぶ。

息子、息女は生ス子、生ス女。

結ブは引き詰むるムに、迫り寄るスを結びて合はするフに働かせたる。

ムセ 咽ブは身迫ブ。

ムタ 語根ムツ 音義語 共、睦ブより轉し來る並び伴ふの意。抱クは身ダク タ

クは讀ミタク、學ビタクの如く、欲求牽引の意。

ムダ は空の轉。

ムチ 鞭は打チかとの説あり。

ムツ 語根ムツ 音義語 睦ブ、ムの一つに寄るにツの詰るを結ぶ、密着の意、結

ブと相通ふ。汚シ、發憤ルは、睦のツの強メにて密着に過ぎて嫌惡の意を生ずる。纏

線は産ツ着。

睦月は産ム月、年月の生まるム月の意、睦月の睦は佳字を宛てたものと思ふ。

ムナ 空シは身無し。

ムネ 胸は身根。棟は胸の内轉、棟の家に於ける胸の身に於けるが如く、最も貴要

の部分なるより來る。

ムマ 馬は其の字音、朝鮮にてマアといふ。

ムメ 梅は其の字音、朝鮮にてメエといふ。

ムラ 語根ムラ 音義語 村、ムの一つに寄るにラの連るを結ぶ。連は村主の略。群ルは村ガル、ガルのガは形容。

紫キは群咲、その花の有様より。

色の紫は草の紫より來る。

ムロ 語根ムロ 音義語 ムの引き詰むるに、ロの窄まりて内の空しきを結ぶ。

メ 語根メ 音義語 マ行第四段、育て養ふ、睦ぶ、廣がる者の苔みたる、向ふの者を引き寄する等の意あり。而して廣がるものゝ苔みたる意より、芽、目等の語を生じ、これが頗る活動する。即ち芽の愛らしき意より、且は目を喜ばしむる意より内轉して女となり、更に芽芽の轉、妻、夫となり、目印とするより衡の目となり、碁磬の目となり、乃至筋目の目ともなる。尙以下に記す複音語中、芽、目に關はるもの多きを見よ。

メカ メカスは目クの他動詞、メカシムの約。

メキ メキ／＼は目キ々々にて顯著なる意。鍍金はメキにて目カス、即ち見えを飾る意。

メク メクは目ク、外見に顯はるゝ意。

恵ムは芽組ム。繞ルは目繰ル。愛シは目グシ、目グシは目クの内外轉。

メシ 飯は『召シ上リモノ』の略。

メス 召スは目爲、目前に在らしむる意。看ス、任ス、同じ。

メツ 愛ヅ、珍ラシ、は目ヅ、ヅは此方のものにする引き寄する意の強メ。

メト 箸は目認木かとの舊説あり、ト筮に問うて目止的を定むるより來れる名と思ふ。

メヒ 姪は音義語 女廣の意か、甥ニ對する。

モ 語根モ 音義語 マ行第五段。窄まりて一つに寄る象あり、物を包む意を持つ。

裳、藻、最、右の意味より來る。喪は思フの約略といふ。

モカ 襖モカリは裳モ假屋カヤの略か。モガクは裳モ搔ガクか。

モク 茂モクはムク(茂)に同じ。挿モグは曲マグの轉かといふ。但しモ、マ、音義相通ふのであるからモに自ら曲ぐるに似たる意味ありと見るがよい。

潜カクレルは藻モ潜クルか。

モコ

モシ 語根モシ 音義語 若モシ、如モシ、モの一つに寄るにシの迫り寄り付くを結ぶ。

殆ど相一致するの意あり、漢字の若、如を當てたると思ひ合はするがよい。人を呼ぶとき、モシ、モウシといふは、「申シ」より來るか、「如何ニ申シ候」など思ひ合はする。

モス 燃モスは燃モヤスの略。

百舌モネは百鳥モネか、其百鳥の音を擬するより。

モタ 黙モタスは持モスより來るか。持モちて放モたさるの意。

麤モトは持モ登トか、手に持つ意より。悶モトユは裳モ絶トユか、裳モ搔ガククと思ひ合はすべきである。

モチ 餅モチは持モ飯イ。稿モチは餅モチ、其性能より。望モチ月の望モチは餅モチ、その形より。

モツ 語根モツ 音義語 持モツ、モの窄まりて一つに寄るを、詰モる、強モきツに働モかする。

纏モトルルは持モツ、故に滞モるより來るか。

モト 語根モト 音義語、本モト、モの窄まりて一つに寄る集中の意に、トの詰り窄まる限定の意を結ぶ。即ち物が或る一點に集中する象である。廻モトルは本モト欲ボル、本モトの處を欲求モトシ願モトみる意。求モトムルは本モトム、本モトを締モトむる、(ムの音義) 本モトを占モトめんとする意。悖モトル、戻モトル、抵モト悟ドクは本モトに返モトる意。モドカシは抵モト悟ドカシ。

案モトは戻モト口モトといふに同じ。或はメダレ(目垂)の轉。最モトモは最モト共。

モノ 語根モノ 音義語 物モノ、者モノ、モの集中にノの物に添モノひ窄モノまるを結ぶ。

モハ 專モハラ、は最ハラ、ハラは原ハラ、又は平ヒラの語に同じ。斯くて專モハラは側カタハラに對する語となる。最早は疾トクニといふに同じ。

モヒ 坩モヒは水を盛る器、水より來る。

主水モヒトリ司シは又『モンドノツカサ』ともいふ。水取の意にて御井水を供するを司る。

モミ 糲モミは裳實モミ、皮を被りたる實の意。

紅葉モミヂは揉モミミ出イデ。紅絹モミは揉モミ色。

モム 語根モム 音義語 揉モム。モの窄まりて一つに寄るを締むるムに働かする。

匆モシは支那にて錢の俗字、我邦にて其を拆きて文メと讀み、錢兩の數に用ゐたるものである。

モモ 語根モ 音義語 百モモ、股モモ、桃モモ、モの包む意を重ねたる。

モヤ 語根モヤ 音義語 紡モヤヒ、共居モヤキ、モの一つに寄るにヤの重るを結ぶ。

モユ 語根モユ 音義語 燃モユ、萌モユ、モの一つに寄るにユの湧き出づる象を結ぶ。

火の燃ゆる、草の萌ゆる、其の意同じ。

萌黄モウキは「萌モエ葱イロ色」葱ネギの萌え出づるときの色。

モラ 音義語 貫モラフ、モの一つに寄るにラの連るを結びて合はするフに働かする。尙盛モルに縁あり。

モリ 森モリ、盛モリハ盛モルの名詞形。

モル 語根モル 音義語 モノ窄まりて一つに寄るにルの引き寄するを結びて盛モル、守モルル、洩モルル等の語をなす。

モロ 語根モロ 音義語 兩モロ、諸モロ、モの包む意に、口の窄まりて内の空しき象を結びて兩モロの語をなす。諸モロは其を重ねたる。

脆モロキは『ボロキ』の通轉か。モロには弱き意味がない。

ヤ行の部

ヤ 語根ヤ 音義語 ヤ行第一段。開くものを控ふる、相向ひ重る、怪しまるゝ、遠きに及ぶ、和らぐ等の意。この行概して穩和の意を持つ。疑問のヤは怪しまるゝ意、尙助語を見よ。

ヤ 屋、舎、家はイへの約轉。

ヤ 音響語 矢、矢を放つとき、ヤと掛聲するより來るか。谷はヤツの略。

ヤイ 炙は燒キ跡。又は燒キ又。

ヤカ 家は家所。

ヤカマシは彌喧シ。頓、即は、稍在リテの約略。

ヤキ 山羊は野牛か。或は羊の音ヤングより來るか。

ヤク 語根ヤク 音義語 燒ク、ヤの重る、ユの湧き出づる意を引き付くるクに働かせたるか。

ヤケ 宅は家の通轉。

ヤケ 宅は家の通轉。

ヤサ 語根ヤサ又ヤス 音義語 優、耻、ヤの和らぐにサの細かなるを結ぶ。ヤスに縁あり。

ヤシ 養フは安ナフ。

ヤス 語根ヤス 音義語 安、易はヤの和らぐに、スの沈み下る、落ち着く意を結ぶ。

休ムは安ム。瘦スはヤの和らぐにスの細きを結ぶ。優に通ふ意がある。

ヤチ 主として北海道にて濕潤の地を呼ぶ。否土の意味か。

ヤツ 語根ヤツ 音義語 谷、ヤの開くものを控ふるに、ツの詰るを結ぶ。窮屈の意。

ヤトル、窶ス、も谷の内外轉か。谷をキハマルと訓むのとも思ひ合はすべきである。

ヤト 宿は家所の略。

ヤナ 柳は和木の轉か。

ヤニ 語根ヤニ 音義語 脂、ヤの和らかにニの和らかに寄り付く、添ひて力入るを結ぶ。

ヤハ 語根ヤハ 音義語 和ラグ、ヤの和らかに、ハの廣がるラの連るを結ぶ。

ヤフ 語根ヤフ 音義語 破ル、ヤの和らかにフの廣がるを結び移るルに働かする。

籤は彌生、吝シは籤シにて身狭き意か。

ヤマ 語根ヤマ 音義語 山、ヤの重るにマの相向ふを結ぶ。病ヒは止の延。

ヤミ 闇は夜見の通轉か、或は光の止む意にて止ミか。

ヤム 語根ヤム 音義語 止ム、ヤの開くものを控ふるを締むるムに働かせたる。

又彌ムにてもよい。

鰥、寡は止ム男、止ム女、その配偶を失ひて止むる意に取れるか。

ヤモ 鰥、寡、はヤムヲ、ヤムメの轉。

ヤヤ 語根ヤヤ 音義語 漸、稍、相向ひ重るヤを二つ重ねたる。

ヤラ 遣ヒは遣リの延。矢來は遣ヒの轉。その文字は借字。

ヤリ 槍は遣リ。

ヤル 語根ヤル 音義語 遣ル、ヤの開くものを控ふるを移るルに働かする。

ヤレ 破レはヤブレの略。

イ 語根イ 音義語 ヤ行第二段。寄せ付け控ふる象、充ちたるもの、弛む象あり。

單音語、射、鑄、は充ちたるもの、弛む意より來るか。

イク 行クはユク。

イト 音義語 糸、イの寄せ付け控ふるにトの詰りたるものを長く續くるを結ぶ。

イナ 否はイヤの通轉。

イヌ 語根イヌ 音義語 寝ヌは、イの弛むにヌの下に寄る(寝)を結ぶ。

イハ 語根イハ 音義語 岩、イの寄せ付け控ふるに、ハの含みたるもの、分るゝ

を結ぶ。イハホのホは起り出で廣がる意。祝フは齋ムの延轉。

イム 齋ム、忌ム、は夢より分化し来れると思ふ。

イメ 夢は寢目、乃至寢見エの約、又は寢見の轉、何れにても同じ意。いとミ、又はメの各音義に溯りても亦同じである。睡眠中に見ゆる現象を指す。然るに夢は上古に於て、之を神秘のものと視ること。各民族に通じたる習ひにて随つて我邦にては此の語が分化發展して多くの重要な語を派生したるものゝ如く。先づ夢は神秘のものなる故、神に仕ふるときの如き、敬虔する意を齋ムと働かせ、齋ムは清淨神聖なるものなる故、之を延べて祝フとなし、やがて慶賀の意に内轉せしめ、齋ムには不淨非禮を戒め止むるより、更に忌ム、即ち嫌惡の意に内轉せしめた。又弓は矛劍と共に神聖なる武器にして、之を用ゐるに謹しみ、注意せしところより、即ち齋ムを内外轉して、ユミといふ名を弓形の武器に負はせたのであらう。後世藝目（引キ弓か）と稱して、弓を一種の禁厭に用ゐるの例など、亦思ひ合はすべきである。

尙進みては黄泉の國なる黄泉も夢の通轉であらうと思ふ。著者は此の解釋よりして

我が太古史研究の上に、得る所が多であつた。

イヤ 彌 ヤの延、重る意。否、物は多きに過ぐれば厭はしくなる。山海の珍味も、腹に滿つればイヤになる。即ち彌が内轉して否となつたものと思ふ。

イユ 語根イユ 音義語 癒、イ、ユ、ともに弛む意。

イヨ 愈はヨヨの延、ヨは重る意、彌と同じ。

イル 語根イル又イ 音義語 射ル、鑄ルは充ちたるものゝ弛む意より、煎ルは寄せ付け控ふる象即ち煮詰る意より來るか。

イロ 音義語 綺フ イの寄せ付け控ふるに口の窄まりたるものゝ動き落ち着かぬ象を結びたるか。

ユ 語根ユ 音義語 ヤ行第三段。控へ寄する齋み慎しむ、弛む、弱き、湧く、重る、漂はしき等の意あり。單音語、湯、は湧く意より。齋はイムの約。

ユカ 語根ユカ 音義語 床、ユの控へ寄するに、懸る力を結ぶ、懸け設くる意か。

床^{ユカ}シキ、は心に懸る意、縁^{ユキ}りも同じ意、リは助辭。曲^{ユカ}ムは懸る意の過ぎたる形。

ユキ 語根ユキ 音義語 雪、ユの和らかに、キの清きを結ぶ。靱^{ユキ}は矢^ヤ筈^ガの轉か。

ユク 語根ユク 音義語 行^{ユク}ク、ユの湧くを引き付くるクに働かす。端^{ユク}ナクは「縁^{ユキ}リ無ク」の轉。

ユス 語根ユス 音義語 揺^{ユス}ル、ユの漂はしきにスの突き出すを結ぶ。

ユタ 語根ユタ 音義語 豊^{ユタ}、裕^{ユタ}、ユの和らぐにタの連り開くを結ぶ。カは形容。

尙ユツに通ふ。

ユツ 語根ユツ 音義語 讓^{ユツ}ル、ユの弛むにツの連るを強め結ぶ。燥^{ユツ}ルは湯ヅル、

ツは強き意。

ユト 裕^{ユト}りはユタリの轉か。

ユハ 尿^{ユハ}は湯張^{ユハ}りかと云ふ。

ユヒ 語根ユヒ又ユフ 音義語 指^{ユヒ}、ユの控へ寄するにヒの充ち足り廣がる、又は

力入れて張り出すを結ぶ。ユフに縁あり。

ユフ 語根ユフ 音義語 結^{ユフ}フ、ユの控へ寄するを合はするフに働かする。

木綿はその皮を以て結ふより來るか。

夕^{ユフ}は夜邊、夜^{ユフ}ル邊の轉か。俗にヨベ又はヨンベといふなど思ひ合はすべきである。

ユミ 弓はイメの條を見よ。

ユメ 夢はイメを見よ。

ユモ 女禪をユモジといふは、湯に入るときに着けしより、ゆ文字と呼び初めたるか。假髮^{ユモ}のカ文字、葱^{ユモ}の一字^{ヒトモジ}などの例であらう。

ユラ 語根ユル 音義語 ユラ、ユの漂はしきにラの動き落ち着かぬを結ぶ。ユルに通ふ。

ユリ 百合は花の揺^{ユリ}り動くより。

ユル 語根ユル 音義語 震^{ユル}ル、弛^{ユル}ム、免^{ユル}ス、ユの漂はしきを移るルに働かせたる

が震ル、弛ムはユに自ら緩むの意あり、其の活語をヤ行に轉したるが免ス。

ユエ 語根ユエ 音義語 故、ユの控へ寄するに、エの添へ寄せ留むるを結ぶ。何れ關係連絡ある意。所以は故ニ。

エ 音義語 ヤ行第四段 掲げ控ふる、送り出で重る、育て養ふ、愛しむ等の意あり。單音語、柄は掲げ控ふる意、江は送り出で重る意か。兄は上の約轉ではなきか。

エト 干支は木、火、土、金、水、に各兄弟の名を付け、木ノ兄(甲) 木ノ弟(乙)と呼ぶよりその兄弟を約し來りたる。

エナ 音義語 袍衣 エの育て養ふにナの物に添ふを結ぶ。

エニ 縁は其の字音、シは助辭。

エビ 蝦は愛肉であらう。葡萄は蝦蔓、髭の似たるより。

エミ 蝦夷はエビスの轉、エビスは蝦巢にて埃乃族が髭髯多きより負はせたるにはあらざるか、巢は鳥をスと呼べると同じく、其の栖む處より來たのであらう。

エヤ 疫は其の字音エに病ミを添へたる。

エラ 音義語 撰ブ、エの掲げ控ふるに、ラの開けたるものを引き寄する意を結ぶ。

エリ 音義語 襟、エの掲げ控ふるに、リの引き寄するを結ぶ。衣の縮りをなすの意。

ヨ 語根ヨ 音義語 ヤ行第五段。控へ寄する象、重る象あり、すべて寄り集まる意を持つ。單音語、世、代、節間、は重る意、夜も節間と同じく、日と日との間に挟まりて重ぬる意より來る。

大和民族はよろづ積極的、興隆的のものを好むの特性あるより、重る意義のヨヤの音を多く吉事に用ゐたのである。

ヨカ

ヨキ 斧

ヨク 語根ヨク 音義語 除ク、ヨの控へ寄するを引き付くるクに働かす。ヨコ

に通ふ。

善クは宜シクの約略。

ヨコ 音義語 横、ヨの控へ寄するにコの引き付け窄むるを結ぶ。結句片寄るの意か。除クに通ふ。

ヨサ 寄サスは寄スの延。

ヨシ 善シは宜シの約。蔑はアシの悪シと混するを厭ひて其の反對の語に呼び替へたるものといふ。

由は寄スより來れるかと思ふ。

ヨス 語根ヨス 音義語 寄ス、ヨの控へ寄するを進むスに働かせたる。

ヨリ 音義語 裝フ、ヨの控へ寄するにツの迫り窄まるを結びて、合はするフに働かするやがて寄り添ふといふに同じ。又ヨスに通ふ。

ヨツ 語根ヨツ 音義語 攀ヅ、ヨの控へ寄するにツの上につくを結ぶ。四ツは數

名を見よ。

ヨト 語根ヨト 音義語 淀、ヨの重るにトの詰り窄まるを強め結ぶ。

ヨハ 齡は世間。婚フは呼バフ。

ヨヒ 宵は夜間の約ともいふ。夜居の轉か、夜居の語古書に多くある。

ヨフ 語根ヨフ 音義語 呼ブ、ヨの控へ寄するを合はするフに働かする。

ヨホ 丁、朝鮮語 人を呼びかくるにヨボシユといへる語が轉じて、丁、夫をヨボと呼ぶに至つて居るが其は單に近來邦人間の通用語のみであるか、否か未詳。中古語

の丁。或は之に縁あるにはあらざるか。

ヨミ 冥は夢の轉か。闇とも相通ふ。

ヨム 語根ヨム 音義語 讀ム、數ム、ヨの重るを縮むるムに働かせたる。

ヨメ 嫁は世女かといへど如何。

ヨモ 四方は四面の約。

ヨリ 時々は寄り々々か。

ヨル 語根ヨル 音義語 寄ル、ヨの控へ寄する重なるを引き寄するルに働かする。集合の意味。因ル。依ル、由ル、皆是より來る。純ル、搓ルもその内轉。

ヨロ 語根ヨル、又ヨロ 音義語 宜シ、ヨの重るにロの窄まりて内の空しきを結ぶ。ヨに重積、ロに包容の義あり、寄ロシといふも同じ意にて、多くの吉事此の語に屬する。

悦ブ、はその寄ロにコの密着を結ぶ。萬は其の寄ロに數のツを添ふる。鑑フはその寄ロに合はするフを付くる。何れも思ひ合はせて知るべきである。(惡シの條參看)

但從倚は餘り吉事でもないが、是は或一點に定着する能はず、彼方に倚り、此方に倚りする意味であらう。依ロ這フ。

ヨワ 語根ヨワ 音義語 弱、ヨの控へ寄するにワの別れ出づるを結ぶ、柔シとも相通ふ。

ラ行の部

この行は概して流轉の意味を持つ。

此の行の音は國語と朝鮮語との語頭に來ること斷えて無い。是れ語頭に濁音の無いことと共に獨り日鮮語に通じて他と別異するところの特色の一つである。

ラオ 烟管のラオは其の系統が分らぬと共に意義も不明であるが、これ恐らくはキセルザヲの『ザヲ』の轉じたのではあるまいか。こゝに疑問を掲げて置く。

ワ行の部

ワ 語根ワ 音義語 ワ行第一段。開けたるものを引き戻す、取締らぬものゝ約まり集まる、別れ出づる等の象あり、此の行概して低卑の意を持つ。單音語、輪、は開けたるものを引き戻す意。

ワカ 語根ワク又ワカ 音義語 若、別ツ、ワの別るゝにカの別れ相向ふを結ぶ。別と若と同語根なるは、別るれば弱くなる（合へば強くなる）若き者は弱き者との意味と見てよい。尙弱シの條参照。

ワキ 脇は別キ。

ワク 語根ワク 音義語 別ク、湧ク、ワの別れ出づるを引き付くるクに働かす。篋はその字音。框は篋より來る。

ワケ 譯は別け。鬻はマゲの轉。

ワサ 語根ワサ 音義語 業、ワの開けたるものを引き戻すに、サの鋭く現はるゝを強め結ぶ、強ひて行ふ意がある。早稻はワセを見よ。

災は業ハヒ、ハヒは形容。

ワシ 走ルはハシルに同じ、ワの別れ出づる意より來る。鷺は上巢の約轉か。鷺は樹の最高處に巢ふよりいへるか。巢は多く鳥の名に用ゐる。鷺見をスミと讀む例など

思ひ合はすべきである。

ワス 語根ワス 音義語 忘ル、ワの別れ出づるにスの沈み下るを結ぶ。失スルとも相通ふ。

ワセ 早稻は早シ稻の約略。

ワタ 語根ワタ 音義語 海、ワの別れ出づるに、タの連り開くを結ぶ。舊説湧キ立ツの略としてもよい、渡る故にワタなりとは如何であらうか。渡ルは海ル。綿は或は渡リユフの略か。延曆中、馬來人が其の種子を齎らしたるに始まりたるものなれば。即ちユフ在來の穀の木のユフに對して、渡リユフと呼びたのではあるまいか。或は梵語バダラ (Badara) の略ならんともいふ。

私は公田のオホヤケ (大宅) に對する私田の謂ひにて即ち我田に申を立てゝ榜示したる、その我田申ならんとの舊説がある。蟠ルは跨ルの轉か。

ワツ 語根ワツ 音義語 煩フ、ワの取り締らぬものゝ約まり集まる、不得要領の

意若くは別れ出づる心細き意にツラフを強め結びたるか、ラフ、は拘ヅラフ、訥ヅラフなどの如く、蔓フ、即ち纏るゝ意がある。憂イツライのツライも根元は是に關係あるか。(但ツライは伴ナイの約でもあるが) 僅はハツカの轉。

ワナ 語根ワナ 音義語 慄ク、ワの開けたるものを引き戻すに、ナの物に添ふを結びナクの活語に働かす。恐れ縮まる意。係蹄は輪繩かといふ。

ワニ 鱷。出雲伯耆の邊にては鱧をワニと呼ぶ。古史にワニとあるは鱧にあらで即ち鱧かともいふ、但し其の語原は未詳。

ワフ 佗ブは悪ブルの意、怖ルル象。

ワラ 音義語 蕨、ワの別れ出づるにラの連るを結びたるか。蕨は童と相通ふ。其の稚きを好むより來るか。笑フは割ルの延、口を割るより。破顔一笑とも意相通ふ。童は割ル部、若き意、若、別と合はせ考ふべし。妾は女子自ら呼ぶ語、幼童といふ意

か。

ワル 語根ワル 音義語 割ル、破ル、ワの別れ出づるを移るルに働かせたる。

ワレ 我はアレに同じ。

ワロ 語根ワル又ワロ 音義語 悪シ、ワの別れ出づるにロの窄まりて内の空しきを結ぶ。割ロに同じ。是が悪シとなり、略されてワシとなり、轉じてアシとなりたりと思はるゝ。ワシがアシとなりたるに就ては今も長州邊の人、ワの音を發する能はず如何に努めてもアとなるの實例なども思ひ合はすべきである。

そこで善悪は寄ロシ、割ロシにて、只積極と消極との差のみ。其が中略されて、ヨシ、アシとなり、やがて善悪の字を採用したのであらうと思ふ。随つて芦葦は上古からアシと呼ぶ音義語であつたが、アシが悪シと同音なるはあしゝといふところより、その反對なるヨシと呼び替たらんこと前にヨシの條に記した通りである。

辛 語根辛 音義語 ワ行第三段。力入りて留まる、充ち足り留まる意あり。

單音語、居、蘭は力入りて留まる意。
堪、井は充ち足り留まる象。

牛 音堰語 猪は其の聲。

牛サ 膝行は居去り。髻は其の延かといふ。

牛ヤ 禮は居合ヒの略か。敬フは禮マフ。

ウ 語根ウ 音義語 ヲ行第三段。留むる象、約まり集まる、内に持つ、伸びたるものゝ戻る、引き戻す、隠るゝ、隠れたるものゝ顯はるゝ等の象あり。單音語、得、は留むる、さては内に持つの意。

ウカ 語根ウカ 音義語 窺フはウに隠れたるものゝ顯はるゝ意あり、カに鹽れて怪しき意あり、捜し求めて顯はさんとする意味を生ずる。ガフは活語。穿ツは右のウカの意を、突き當るツに働かせたる。親族は氏柄かといふ。但し氏は阿行。

ウク 語根ウク 音義語 受ク、ウの留むるをクの引き付くるに結ぶ。得クといふ

に同じ。

ウク 音響語 鶯はウグヒは其の聲、スは巢にて鳥を指す意。

ウケ 食は受ケより來る。契フは受フ。

ウシ 憂シは憂ハシの略。失フは、失スナフ、失セナフの轉。

ウス 語根ウス 音義語 臼はウの内に持つにスの迫り寄るを結ぶ。失スはウの隠るゝにスの沈み下るを結ぶ。

ウタ 語根ウタ又ウツ 音義語 疑フ、ウの隠るゝにタの強く相向ふを結ぶ。隱微にして何れとも決し難き意か。ガフは窺フのガフに同じ。尙ウツと相通ふ。

ウチ 語根ウチ又ウツ 音義語 内、裏、ウの内に持つにチの詰り充ちたるを結ぶ。ウツと相通ふ。

ウツ 語根ウツ 音義語 現はウの留むるにツの確かなるを重ね結ぶ。移ルは其が流轉する意、虚は移ロといふに同じ。口は窄まりて内の空しき意。器は内双物より來

るか。蓋し太古の民族が貴ぶところのもの、武器より先きなるはなし。されば双物の一種を内双物又は打双物（打はア行）と呼び初めたるが、終に大凡その器具に及びたるにはあらざるか。卯ツ木は虚木。幹の中の虚なるより。

ウト 語根ウト 音義語 疎ム、ウの隠るゝにトの詰り窄まるを結ぶか。ウトくといふ意味など合はせ考ふべきか。

ウヘ 語根ウベ 音義語 諾、ウの留むるにへの添へ寄するを強め結ぶ。

ウミ 語根ウミ 音義語 膿、ウの内に持つにミの充つるを結ぶ。

ウム 語根ウム 音義語 埋ム、倦ム、ウの同上にムの締むるを結ぶ。倦ムは充滿しては厭ふ意を生ずるをいふ。

ウヤ 敬フはキヤマフを見よ。

ウラ 語根ウラ 音義語 裏、心、ウの隠るゝ乃至内に持つにラの取り締らぬを結ぶ。

トフは心合フ、或は心問フ、心を知る手段の意。恨ムは心ム、心を締むる意より来る。羨ムは心病ム。浦は裏、船の風に隠るゝ處。

ウレ 憂フは心フ、心を勞する意より来る。

ウウ 語根ウウ 音義語 植、飢、植はウの留むるを同じウに働かする。強く得る意か。飢はウの隠るゝに同じウを働かする勞れの甚しき意か。

エ 語根エ 音義語 ワ行第四段。育て養ひ留むる、添へ寄せ留むる、送り出す等の意あり。

單音語、餌は育て養ふより来る。繪は其字音。

エク 語根エク 音義語 醜シ、エの添へ寄せ留むるに、クの引き付くるを強め結ぶ。

エツ 吐ツクは送り出すのエに突クを添へたる。

エト 屠者は餌取り。

エフ 語根エフ 音義語 醉フ、エの育て養ふを合はするフに働かせたるか。醉へば一時氣力を興奮せしむればなり。或は添へ寄せ留むるの意か。醉を來す品物は、人を引き付ける力あればなり。

エム 語根エム 音義語 咲ム、エの送り出すを縮むるムに働かせたるか、エミ割レなどいふより見れば何れは内より突き出で、開くる意であらう。

エラ 歡喜グは和ラグの約轉か。

エル 語根エル 音義語 彫ル、エの添へ寄せ留むるを移るルに働かせたるにて。

或物に付き施すよりいへるか。

ヲ 語根ヲ 音義語 ワ行第五段。伸びるものゝ戻る、向ふなるものを引き寄する、重く留まる、雄々しき、長く續くものゝ約まり集まる等の義あり。單音語、小、尾、緒、芋は長く續く者の約まり集まるより、雄、男は重く留まる、雄々しき意より來る。ヲカ 岡は尾所、尾は山の尾、岡は其の尾の所である。岡者、岡惚レ等のヲカはホ

カの轉。字は借字。可笑シはヲムカシ、ヲムカシは、ア行の方より轉じたるにて面向シ(趣カシ)の約、面白く好ましきことをいふのであらう。拜ムは折リ屈ムの約といふ。

ヲキ 萩は招ギ、尺蠖は招ギ虫。

ヲク 語根ヲク 音義語 招グ、ヲの向ふなるものを引き寄するを引き付けるクの強メに働かする。結句眞似クと同じ意となる。童男は小グ人か、人は名、大人をオトナといふなど思ひ合はさるゝ。

ヲケ 桶は芋筍。

ヲサ 語根ヲサ 音義語 長、ヲの重く留まるにサの細かく分るゝを結ぶか。多數の者を押ふるの意あり。専々は長々にて主たるの意か。治ム、收ムは長ムの意。箴は同じく收拾する收ムの意か。幼シは長無シ。

ヲシ 音義語 愛シ、ヲの向なるものを引き寄するを、シの迫り寄り付くに結ぶ、

教へは愛シへ、引き寄せて密着せしむる意。

ヲス 語根ヲス 音義語 ヲの向ふなるものを引き寄するに、スの迫り寄るを結びて、食すの語をなす。

ヲチ 音義語 彼、ヲの長く續くにチの詰り充ちたるを結ぶ。老翁はア行オヂ（大父の意）の轉か。伯叔父は小父。

ヲヅ 怖

ヲト 音義語

少男はヲの雄々しきにトの強きを結ぶ、コは子、少女は同上の女。

踊ルのヲは伸びたるものゝ戻る象、トは詰りたるものを長く續くる意、二字にて伸べたり縮めたりする意となる、即ち踊るの形状である。

驚クは踊ルのルを延べて内外轉したるもの。

ヲノ 斧

恬グは慄グの轉か。

ヲハ 終ルは尾ハル、ハルは根バル、剛バルなどのハルに同じ。

ヲヒ 甥は、男ヒ、ヒは廣がる意。

ヲヘ 竟へは終りの約轉。

ヲメ 叫クは男メク、猛る意より。又音響語、其の聲。

ヲリ 語根ヲル 音義語 折、檻、ヲの向ふなるものを引き寄するに、リの父音ルの引き寄するを結ぶ。

ヲル 語根ヲル 音義語 折ル、居ルは同上の意。

ヲロ 大蛇は埃乃語、大本流の意。『太古史闡明』を見よ。

ヲヲ 語根ヲ 音義語 唯々、撓ル、ヲの伸びたるものゝ戻る意を重ねて、唯の音ふ意となり、撓ルの弾力ありて曲らんとしては伸び戻るの意を生ずる。

第二章 國名數詞方位並歲時名

一 日本の國號

記録に見えたる國號の最始は即ち大八洲である。是は二尊の國土經營事業に於て、最初に成就したるのが八個島であるから大八洲と名づけたとあるけれども、其は後世の推量で、唯數の多きところより呼び初められたものであらう。次に見えたるは大神宮様の神敕に在る、豐葦原之千秋長五百秋之水穗國であるが、是は美稱を冠したる國號で前の大八洲の島の名に在る大倭^{オホヤマト}豐秋津島と共に。米産國たるところから來たのであらう。秋津の名、神武天皇の御勅云々の傳説もあるけれども姑く預り置きて、當時高天原は帝都の稱で葦原之中國とは地方を指していうたのだと思はるゝ。中國とは中央の意味でなく、葦原之中之國で、即ち農村田園の意味である。猶後世の一畿七道を

區別したる如くに。然るに前人殆んど悉く此の解釋を誤まつて居た爲、我が太古史の研究上、非常の誤差を生じたのである。

さて全國をヤマトと呼んだのは神武天皇以來、帝都が畿内大和の國に置かれたからのことなるは勿論で、其に大倭と倭の字を當てたのは、日支交通以來のことで、即ち前漢書から其れが見え、後漢書『其大倭王居邪馬臺』と書けるなどに取り、更に倭の字の雅ならざる（倭本音はヤ、從ふ、慎しむ等の意あり）を厭ひて和の字に改めたのである。天平九年改大倭國爲大養德國同十九年之を復舊し天平勝寶元年更に大和と改む。

又日本といふ文字は聖德太子の吳に贈る國書に所謂『日出國之天子』云々から來たともいふけれども、日本紀には神功皇后の韓土征伐のときから、この文字を使つてゐる。勿論其れは後に出來た書であるからのことではあるが、要するに其の出所は不明である。

ヒノモトといふは日本を訓讀したのといふ説もあるが、外國人が（唐書に日本云々とあり）日本と書いたから此方で日の本と呼んだのか、此方で日の本と稱へたから外國人が日本と書いたのか、それも不明であるけれども兎に角日本は東の端であつて、日の出づる所といふことには、上古から疾く氣附いて居たのであらう。

後世の諏方縁記に樺太の住民に『唐子、日ノ本、渡リ黨三類云々』とある日ノ本は如何なる部族で、何故に呼んだかは不明であるが、兎に角、西には海外に陸のあることが知れて、東には陸が無いとすれば、其處を日出づる所と思ふは、當時の人智に於ては當然であつたであらう。

尙日本の名に就いては、『民族と歴史』第一卷第三號（大正八年三月）後藤肅堂氏の「日本國號の出所に就て」の考證、頗る價值あるものと思ふ。有志の士は一覽された

ろ。

一一 諸國の名稱

こゝに諸國といふは、嵯峨天皇の御宇に越前國を割きて加賀國を置かれてから明治維新に至るまで、久しく六十六個國二嶋であつた、その國名を解くのである。無論前人の説も種々あるが、今一々其等を擧ぐる違はないから、成るべく單刀直入的にかたづけやうと思ふ。

山城 桓武天皇以前の文字山背が正字で、大和を中心として山の背と呼んだのであらう。山城志、『以其在大和國北爲名』とあるは當つて居る。

大和 は山門（縣居説同じ）地勢より來る。元はオホヤマトといふたのが略されたのである。

さすがに帝都の地なるだけに此の國名に就いては前人の考説澤山であるが、大抵入念なる妄説である。

河内 大和から見て大河（宇治）の此方といふ意（本居説）元は大河内というた。
和泉 河内より分れ、後復離合あり、天平寶字に獨立す。府中村に美泉あり、其が
郡名となり國名となれりとの本居説、可。但し和の字は元とニギイヅミと讀みけんを
後にニギを省けるならんとは如何。和の字は唯好名の二字にする爲に、差合なき文字
を添へたのであらう。

攝津 元と津の國と呼びたるを、大寶職員令、攝津職帶津國云々。難波と津の國と
を攝ね掌るより來る（本居説）津の國とは上古の開港場であつたから。

伊賀 伊勢より分る、名の原不詳。地勢峻嶮なる處から巖の強メ、イガ（毛毬など）
より來るか。

伊勢 神武天皇の御製に『神風の伊勢の海の』とあり、尙種々の傳説もあれど、之
を地の名としたのは恐らくは大神宮御鎮座後のことではあるまいか。而して神風の伊
勢といふとき、その神風は普通の冠辭でなく、正の主格であつて、イセは其の作用狀

況を指したのであらう。即ち神風のイセ勢ひよく迫り添ひ寄る音義から出來た語であ
らう。後、威勢の字を當て、イセナモノ、イセイノヨイなどいふのは畢竟イセの音
義から來たのであらう。就いては伊勢の勢の字は、大に意味あることと思ふ。伊勢津
彦云々の説は勿論、後の事であらう。（尙附け加へる。伊勢の神風は其の言句が先に在
つて、地名は後に出來たと見るのである。）

志摩 伊勢より分る。島の意。島嶼多きところより。

尾張 尾羽張の約。劍の名から來たので、日本武尊以後のことであらう。熱田の劍
は草薙劍で、尾羽張劍とは違ふけれども元來尾羽張は或一口の劍の名にあらで、劍の
形狀をいふたとすれば、草薙劍の鎮座の處を尾羽張と呼ぶに差支はなからう。

三河 三大川あるより。

遠江 遠ッ淡海の約。滋賀の淡海を近ッ淡海と、淡海の國を遠近に別ツたのである
こと勿論である。

駿河 鋭き河流の多きよりスルガハ。然るに幸ひに音義相通の駿の字があるを見つけて出して、其をそのまま用ゐたのであらう。駿の音をスヌと和め更にヌをルに通じたので、乃ち音で讀んでも、訓で讀んでもスルガといふの語が出来たのである。(角鹿ツスガを敦賀としツルガと讀むなど参考すべし)

伊豆 は出づ、地勢より取つたのであらう。埃乃語岬イヅとしてもよい。

甲斐 は山の峽カミ (本居説同じ)

相摸 サの迫り相向ふ、クの引き付くるを、締むるムに働かせたる音義語、サクム、祝詞の磐根木根踏ミサクミテとあるのがそれである。相摸は地勢峻嶮なるより、サクムの地といひ習はしたのが、やがて國名となつたのであらう。又相摸の文字は朝鮮音サグム、相武の邊、韓の移住民が多かつたので、彼等が、サクムなる國語の地名に、相摸の字を嵌めたのであらう。無論借字。

武藏 音義語、身狭ムサシ (ムサ苦シイなど) の意、上古の旅行者が、此の地方の草萊

き細徑を分け進るとき、一層のムサシの感を起したのであらう。武藏の字は朝鮮音ムング。シは朝鮮の助音。移住民が嵌めたことは相摸に同じ。

右二國名は日語の朝鮮音である。字には勿論意味はない。

安房 上總より分る。粟の意。神武の御宇天富命、四國の阿波より精農を率ゐ來りて麻穀を植ゑしより粟アハ、總アハの地名が出来た。

上總 右の解に同じ。總アハは麻。

下總 同じ。

常陸 字の如くヒタチ (直路) である。上古東海道を巡るに、相摸より房總に舟航し、其より利根だの、霞湖など、南船北馬と取り替へ乗り替へしてゆくに、總の國を過ぐれば、それより陸奥まで陸路のみであるから、乃ち斯くは名つげたのであらう。日本書紀日本武尊が到りたまひし日高見の國は、今は陸前北上川の邊であらう。

東山道

近江 遠ツ淡海に別つ爲に近ツ淡海。後に近江の二字に約した。然るに呼び方は昔のままに單にアフミというて居る。

美濃 古書に三野とも、御野ともあるより、各務野、青野、賀茂野の三野なりともいひ、又朝廷の御獵場、禁野の意、御野なりともいふが、この二説は何れも一理づゝある。が我は御野説に従ふであらう。但し科野の野と對する意味あり、尙考ふべし。

飛驒 は鄙。今も隨分の邊鄙であるが、古への志賀の都、さては大和の京などからいふたら、さぞかし鄙の感が強かつたことであらう。

信濃 は科野、科の木が多いところから。

上野

下野 毛野國、後に毛を略して上下に別つ。然るに稱呼は、カミツケ、シモツケと呼びて、終りのヌを省いて居る。

毛野は桑麻五穀を多く産するより來る。往昔相摸は地形狹隘にして唯踏みサクミて

往來するのみ。武藏は叢篠沼澤に委したる時代に於て、東國にて、先づ農業の開けたるは、房總に次いで、兩野である。そこで毛野の地と呼び習はしたるが終に國名となつたのであらう。

近來兩毛は毛人の國で、即ち蝦夷の國であつた。其が國名の起原であるといふ人あるが、如何にも蝦夷は住んで居たらうけれども、毛野が毛人の毛でなくて、作毛の毛であることは、右の記述で明白であらう。

陸奥 正字、ミチノオク、東方巡檢の終極である。後世其をムツともいへるは、東北人の訛音を其のまゝ採つたので、尙ノオクを省いたのである。

出羽 越後陸奥二國より分る。出端の意。太平洋岸より常陸陸奥を通りて、日本海に出でたるところ。

北陸道

若狹 別ク狹、狹く別けたるより來る尤も別クと若とはその音義が同根であるから、

若狭の文字そのままで宜しい。埃乃語ワツカ（水）サン（下に）かとの説も悪くない。越前 越は古志、コスの正字、上古出雲が日本海方面の中心たりし時代に、遙に海を越して往來したところであるから、越前以東、越後出羽までを越シと呼んだ。而して今に古志郡が越後に在り、大國主の妾沼河媛が越後の出であり、其の子建御名方が信州に往いたのも越後から上つたのである等より綜合するに、所謂コシの國の首部は越後であつたと思はるゝ。其の潮流の關係が出雲から越後へ向ふが都合が好いといふことで、今も出雲崎といふ港が越後に在る位である。

加賀 越前より分る。鏡の略であらうか。カガミの地名は美濃に各務、陸前に加美、土佐に香美があるが、何れも打ち開けたる處なるより察すれば、加賀の地勢が廣濶なるところあるより付けた名であらう。鏡磨師が多い故との説事も事實ではあるが、但し後世のことであらう。鏡の地名は其れ故でなく、蓋し地勢から來たのであらう。或は蘿摩草の多きところより來るか。蘿摩今名カガイモといふ。右等の地方果して此の

草多きか、取調べたし。

能登 は長閑。彼の海中に突き出た岬角を廻るに、何で長閑といふことが出來ようぞとは、久しく怪しんで居たところであつたが、近年數回彼の地方を通りて、大體の地勢を觀察するに、能登は元と半嶋でなくて離れ嶋であつたらしい。今の七尾線のところは海峡のあとで、其處には能登江村を始め、瀧崎、有江、本江、尾崎、水白、久江、深江など、海浦に縁ある地名も澤山ある。そこで出雲から越後へ通ふに、かの日本海の荒波の間にこの海峡を過ぐるときが、常に長閑、平穩であつたであらう。依つて嶋の名、地の名を長閑と呼び習はすに至つたであらうと思はるゝ。

然るに之を埃乃語に照せば容易にその類語を發見することが出来る。即ちバチエラ
ト 氏辭書、北海道埃乃地名のところにノツ、オ（鈍き岬）ノツサム（岬の側）ノツオ
ト（岬を負ふ場所）ノツ、オロコタン（岬に於ける村）等ノツ即ち岬に因る地名が
數々あるが、右は埃乃語ではツは促音で母音がなく、響かぬ音であるけれども和人は

概ね之を響かせノツオをノツ、ノツオトをノツトサキ、ノツ、オロ、コタンをノトロサキと呼んで居るのである。就ては能登は單純に、埃乃語のノツ即ち岬から來たのであるまいか、姑く兩説を存して後の考を待つこととする。

越中

越前に同じ。

越後

佐渡 は狹門（本居説よし）

山陰道

丹波 は谷端か。山城より入る谷の口であるから。又豊受大神宮の在りし處より田庭ならんとの舊説もあれど飽かぬ。

丹後 丹波より分る。その名も丹波の名を分けたのである。

但馬 は谷間か。

因幡 は稻場。

伯耆 素尊の母の來りし國といふ意にて「母來」なりとの説あれども憑據を得ず。

予先年、西伯郡にて此の處に木あり俗に母木と呼ぶ。葉莖を摘めば乳の如き汁を出す云々といへるを聞き出し、その後他の郡にて尋ね見たるに要領を得ず、結局徹底するに至らずして止んだ。果して其木が多しとすれば、信濃の科の木に於けると同じく、この母木より地の名が出來たか。尙折を得て探索せうと思ふ。

凡そ國名は地勢等の自然と、産物とに取ることが二大原則となつて居る様であるから、その邊の見當から搜索するがよいと思ふ。人名に基づけた傳説はその多くは偽作である。

出雲 は正字。出雲で見れば南方の連山から立ち昇る白雲が、際立ちて美觀である、予美濃東京等にて、斯くの如く美しき雲を見たことはない。一つは自分の思ひ做でもあらうが。兎に角、八雲立つの歌で國名を解くには十分である。然るに一方此の地方が特に埃乃に關係ありたるべきことは否定し難く、越の夷族ヤマタノオロチとの交渉

を始めとし、出雲と伊豆駿河地方とに同一乃至類似の地名多きこと、事代主命を夷の神（蝦夷地の總督である）といふこと、陸前地方に出雲家一族の遺跡らしきがあること等より考へ合はすれば、地名に埃乃語の存することは怪しむに足らず、随つて出雲は埃乃語エツ（岬）モイ（灣）ならんとのチャムバーレン氏の説、亦捨て難い心地がせらるゝ。殊に出雲風土記惠曇の濱、繪鞆の彫壁などいふのがあるを見れば、古くはエトモと呼んだこともあるかと覺ゆる。併し出雲の雲の字は單にモの音字として借用さるべき理由なければ、イヅクモの出雲も事實なるべく、エツモイの地形も實際であり、兩々偶合したのであらう。斯様の例は勿論有り得ることであるから、強ひて一方を排して一方に限定する必要は無い。尙若狭、能登、紀伊等の場合も同様である。

石見 も正字、予數回石見に遊びて、益々この名の事實なるを知つた。見は滿ツの意としても宜しく。

隱岐 は沖。

山陽道

播磨 埃乃語。ポロモイ、大なる靜なる灣の義。非常に苦しんで搜索した末、終に愉快なる發見をなし得た（と獨り私に喜んで居る）段々比較研究をして見たが、日本語では張濱（傳説にもある）か、遙ル間かの外、到底似つかはしい意味を知ることが出来ない。然るに之を埃乃語に照らせば、迷宮の秘鍵を得たるが如く、意外に容易に解くことが出来たのである。即ちポロモイは大なる、而して平穩なる灣の義で、播磨の地勢ソツクリであるが、其れのみでは無論此の説を押し立つるに不足であらうから、多數の傍證隨伴者を驅り催して、その行列に加へたのである。

即ち明石が（アツカウシユ）水の有る所の義で、陸奥にも明石といふ地がある、次に

須磨がシユマで石礫の義。

舞子がモイコタンで灣の場所といふ意、下のタンが失はれたのであらう。

飾磨は陸奥に色磨郡あり、和名抄之加萬とあるが即ち埃乃語『善き神』の義。

尾上はオンネナイ（大なる澤の義）のオンネを和めて、ナイを略いたのではあるまいか。地勢は全く其の意味に合つてゐる。

高砂はトクカラソ（魚の名）コタン（場所）の約略と見るも、甚しき無理ではあるまい。又攝津の内ではあるが、

武庫はムカベツ（塞がりたる河、満潮毎に河口に集る砂の多量なるに依りて此の名あり）の約轉と見る方適切であらう。

自分の郷里は肥前の有馬である。この有馬と播磨とは、元と同一語か、少くとも密切の関係ある語であらうとは、疾くに着眼して注意して居たところであつたが、果して同語であることを知つた。即ちポロがオロと轉することは埃乃語にもあるので、

ポロモイ||ポロマ||パリマ||ハリマ（播磨）

オロモイ||オロマ||アリマ（有馬）

ともなれば、乃至は播磨が直接に

パリマ||アリマ

と轉したと見ることも結構である。そこで有馬の地勢はといふに、肥前の有馬は、最も平靜なる大きな入江であるが、陸奥の有馬はまだ見ねど、日本書紀（齊明四年）『遂於有間濱、召聚渡嶋蝦夷等、大饗而歸』とある程であるから、極めて小舟を着くるに宜しき平穩なる灣内なのであらう。

攝津の有馬は今山間に在るが、元は湖水の邊であつたらしい。

以上の理由だけで播磨を埃乃語ポロモイに基づくと解することが出来ると思ふから、他に明白なる反證を發見せざる限り、先づ是れだと斷定して置く。（因みに江州米原も埃乃語（入江の口）であつて、其の町名も入江というてゐる。）

美作 備前より分る、語意未詳。三馬、御馬などの地名は他にもあるがどうしても緒を得ない。

備前

備中

備後 所謂吉備の國、其のキビは黍であらう。日本一の黍園子は桃太郎以來の名物で、今も岡山の自慢物であるが、閑話休題此の地方は古くから他より優れて黍を産出したものであらう。

安藝 土佐には安藝の郡があるが、アキの本義は未だ見當が付かぬ。或は山海の景色の明ラカなるより取つたのではあるまいか。

周防 も未詳、スハ、或は差波ならんとの舊説あれど、何れも無證據。且つ地名は普通世俗の發音に注意する必要があるから、これも成るべくスヲウの音に近い方面に於て物色して見たいと思ふ。(諏方の轉かと思はるゝ節もある)

長門 元は穴門其の穴の如き水道が長いところから、後に長門と改められた。穴門の時代は兩岸連続したる間の洞門であつたとの想像説もあるが、是は地質學者の判斷

に待ちたい。

南海道

紀伊 元と木の國、後母韻を添へて二字となし、好字に改めて紀伊となした。日本書紀神代卷に在る素尊の一族が、當時全國に樹種を植ゑ、終に此の地に鎮座されたいふ記録は、他の普通の所謂地名傳説と頗る其の選を異にするものあり、更に古語拾遺に依りて裏書され、大體に於て疑ふの餘地なき程になつて居る。今に至つて吉野、高野、大臺ヶ原の大森林が無限量の良材を出すのも、必ず由つて來る所あるべく、隨つて木の國といふ名稱の起原は之を説明するに十分であると思ふ。

然るに多年和歌山縣の知事たり、現に(大正八年)我が住む岐阜縣の知事たる鹿子木氏(小五郎)は此の國名を埃乃語のキ即ち葦のある所の義に基づくと首唱して居るが、成る程紀伊は蘆の名所で又和歌浦も日本語で解けず。却て埃乃語のワツカ、即ち水の浦なりといふ方が痛切に聞こえ、其の他埃乃語説の傍證となるべき地名が幾等も

あるであらう。就ては此の説も捨て難いが、さりとして此の説を取るが爲に、前記傳説的の説明を廢棄するにも及ぶまい。其は二様若く、其の以上の原因が偶然同一の結果に落ち合ふことも、實際有り得べきことであるから。例へば東京から大阪へゆくのに、船でも往ければ、汽車でも往ける。兩々並び存せしめて差支はない。乃ち紀伊の場合に於て、自分はどちらも事實だと思ふ。そして互ひに相傷つくることなしに、並に存在し得ると思ふ。

淡路 是は二尊が大八洲帝國建設の初め、第一着に經營し玉うた嶋である。餘りに陸が小さいところより淡々しき意を取りて斯く呼び初めたのではあるまいか。難波より阿波に至る渡海の道にあたる故に阿波道嶋なりとの本居説は淡路が阿波よりも後に命名されたこととなりて無理である。

阿波 粟の國で十分であらう。

讃岐 未詳。本居説古へ多く梓竿を調貢せし故、竿之調といひけん言葉のやがて約

略されてサヌキとなりたらんとの見解も一理あるが、あき足らぬ。

伊豫 古事記に伊豫の二名嶋とあり、其は四國嶋の總稱で、この大きな嶋を探検されたとき、ヨ（豫）ともエ（愛）とも呼ばれたであらう。ヨは悦ぶ、エは愛づる、いつくしむ意で二字ともに日支音義の相通である。さて其のヨが伊豫となり、エが愛媛となつたのであらう。愛媛は當時の地方長官が婦人であつたのだと思はるゝのである。土佐 は門狭、佐渡を上下にただけである。其は船にて土佐の中部に入り込むに、頗る狭き水路を通るその地勢から來たのであらう。

西海道

筑前

筑後 筑紫の名稱については數説あり其の中で萬葉の「馬の爪つくし云々」の歌から行き盡しの意味かといふのと、今一つは貝原益軒の海岸壘壁の「築ク石」から出たといふのが、最も價值あるものと思ふが東の端が道の奥なれば、西のはては行き盡

す、これも一應道理と思ふ。予は寧ろ此の方を取らう。

肥前

肥後 火の國。兩肥と筑後と三國にて抱き合ひたる有明海に所謂不知火なる海光の現はるゝこと、太古以來幾千萬年、今に變らぬ事實である。この自然現象に基づきたる名。

豊前

豊後 豊の字に關する風土記の説は例の地名傳説にして取るに足らぬ。是は二尊大八洲建國の時の「豊日別」に基づいたのであらう、古事記に當時の地名を記したる中に、四國嶋は概して地方長官の名を取り、阿波を大饗媛、讃岐を飯依彦、伊豫を愛媛土佐を建依別（別は方面の意である。別命といへば其の方面の長官のとななる）と呼んであるが、九州嶋は地勢の上から主として日當りの有様を觀察して名づけてある。是は最も暑い地方であるからのことであらう。即ち筑紫を白日別、豊の國を豊日別、

肥の國を建日向日豊久士比泥別、熊曾の國を建日別と呼んである。その豊日別とは、豊かな日の當る方面といふので、豊は盛んな意味ともなるが裕容寛和の意味ともなるから、つまり優しい緩やかな日の當るといふ意味から來たのであらう。

日向 九州にても最も熱日の當るところ、所謂建日別（猛日の方面）の地方であるから日向を國名となしたのも相當であらう。日本書紀に景行天皇が子湯の縣に幸して東を望んで左右に謂つて曰く、是國は直に日の出づる方に向ふと。故に其の國を號して日向と曰ふとあるのも、普通の地名傳説とは聊か異なるやの感なきにあらず、更に天孫瓊々杵尊が朝日の直刺國、夕日の日照國なりと仰せられた（其の跡、今薩摩國川邊郡に在り）救語等より考ふるに、上古、別して日當りに注意されたことが察せらるゝので、右の景行天皇の頃か、乃至は其の後かより、自然日向と呼びなされ、終に國名となつたのであらう。

大隅 日向より分る。日向の南の隅である。

薩摩 日向より分る。彦火火出見尊御兄弟の山の幸、海の幸の故事に基づける幸嶋、又は幸濱ならんとの説、孰れにても宜し、

但埃乃語では、ツツマは乾きたる半嶋又は池沼となるが此の邊伊作、穎娃、知覽、揖宿、給黎など、不可解の地名が澤山あるから、何れ先住民族の言語の遺物が少からぬことであらう。唯遺憾なのは、熊曾、土蜘蛛等の言語が、その種族と共に絶滅して、探究の途なきに至つたことである。

壹岐 韓地往復の休泊所たるより、息ひ、即ち息キの嶋であらう。(本居氏同説)

對馬 同上渡海の要津なるより津嶋と呼んだのが起原で、元は津嶋と書いたのである。對馬とは法の如く好字を撰んだのではなくて、魏志に書いたのをそのまま採つたといふことである。

以上一畿七道六十六國二嶋。國名の文字は元明天皇和銅六年五月、畿内七道國郡郷之名は好字を著けよ云々。又延喜の民部式に凡そ諸國部内之郡里等名は併せて二字を

用ゐ、必ず嘉名を取れとあるより、皆其に従ひて然るべき字を嵌めたのであること世人の熟知するところである。

尙國名には限らないが我邦の地名に埃乃語の多く遺つて居ることは、疑ふべからざる事實で、是に就ては多少の腹案もあるが、題外であるから他日改めて發表することとする。

三 數 詞

少くとも十個迄の數の名稱は各民族の原始時代、早期に定まつたるべきものであるから、言語學者が言語の系統的分類をなすに際りて數詞は最も重きを置く所のものである。然るに日本の數詞はその言語が世界に類なきとよりも一層特絶の状態に在りて、言語の姉妹語たる朝鮮にてすら、數名は全く無縁故である。随つて其の語原についても、何等傍證を求むべき分野もなく、最も難解のものとなつて居るが、今試みに予の

鄙見をいはんに、國語の數詞は一より十まで一時に組織されたるものでなく、長き或は短き期間を隔てて漸次に發生したるものであらう。其の仔細は情各民族の基數單位を案ずるに、或は二を以て一單位となすあり、四を以てするあり、五を以てするあり十を以てするあり、二十を以てするあり、是皆數の觀念が最初一時に完成されず、其の民族の進むと共に漸を以て發達したることを示すもので、又幼兒が數詞を覺ゆるを見るに先づ三歳より言ひ習ひ、四ツ五ツまでは覺束なく、五歳頃より自身の齡より多數の數詞を記憶するに至るものである。(阿弗利加のホツテントット人は三までを數へ得、先年滅亡したタスマニア人は二までより數へ得なかつたが、動物では猿の六まで、犬の七までを最多とするのである。)是等の事實から推して、我が數詞を觀察するに左の如く明白なる段落あり、例へば岩石の地層を見るが如く、其の成立の次第を知らるゝのである。

（ヒトツ
フタツ
ミツ
ヨツ
イツ
ムツ
ナナツ
ヤツ
ココノツ
ト

第一對

吾單 一
ト 別ルル始メ
汝 一子ア
愈 加ハル
至リテ止マル
三ツヲ結ブ
尙 加ハル
四ツヲ彌ヤ重ヌル
コゴシキ數
數の終り

先づ以て觀念は自分自身に始まるであらう。一をヒト（人）ツと呼ぶことは、即ち人と同語原で、充足到達確實の意である（英語其他歐洲諸國の語、亦一と人とを同一に呼ぶ例がある）第一に我れが在つて次に相向ひたる對手がある、親子夫婦が其れで

ある。その時、別るゝ音義のフタツといふ語が成り立つ。次に親子ならば他の一人、夫婦の間ならば最初の子、即ち吾と汝の外に彼が出来る。そこで満足の意の三ツが成り立つ。然るに更に子が出来た（又は何でもよいとして、兎に角増加すること）數の多きを喜ぶ我が民族性のことなれば、愈々出でゝ愈々妙なりと打ち豫んで其の音義のヨツ其れから更に今一つ加へ片手の指を折り終りて到り止まる、一應こゝに休憩と来る。で、五ツは白鳥説にもあるが如く至ル、最トなどと同語原なれば、到り止まると見てもよく、亦四ツの豫ブの例を追うて愛シム意と見るもよい。

これで片手の指は折れたが、やがて今一つ殖えて来た。そこで六ツをフユの轉音と見てもよいが（古書に六ツをムユとあり）前表の通り、今度は既成の數名に溯りてその類似のものを求め、六は三ツの倍數なることを知りて、其を結ブ、睦ブ、纏ムル意のムツと呼んだ。茲に注意すべきは他の五個單位、即ち五進法を取る民族に在りては例へば羅馬數字の如く五加一（VI）の意を以て六の數名を組み立つべきであるが、我

等の祖先は其の途に出でず、更に新しき數名を造りて、十進法に到達させた。しかし五までゞ一應の段落を終つて居ることは、前表を見ても分るであらう。

然るに喜悅の數は進んで、尙更に一を加へたので、物に添ふ意のナ音を取つてナ、ナツ（ナノ數か）と名づけた。次に殖えたのを再び前に溯つて類似の數名を求め、四ツの倍加なるを知つて彌ヤ増のヤツと呼んだ。六ツと八ツとに既往を回顧した趣があるところより察するに、五ツと七ツとに於て、姑く休んだ譯であらう。

尙も益々増加したので、ココに至つて猶豫ならず、凝しき音義のココノツと付けたが、あとには指が一本残つて居る、これで全く仕舞である。そこで數の終りの音義で一層進んだ推理的なるトヲと名づけた。

十より以上は全く推理的組み立てである。こゝに溯つてツの意味を説かんに、ツには上に付く、突き當る、詰る、連る、確かなる音義があつて、留まる意、約マル、一ツ宛、並に助語の書きツツ語リツツのツツが、即ち其の意から來たのである。そこで

物を數ふるに（數折ルの義）その一々にこのツを付けて、それが數であることを明らかにしたので、即ち一ツより九ツまでは之を語尾につけ、十に至りて語頭に付けてツヲ即ち個尾、數の終りと呼んだのが、やがて通轉してトヲ、となつたと思はるゝのである。さて十以上はトヲヒトツ（十一）トヲフタツ（十二）などゝ續け（トヲアマリヒトツなどあるは優雅の形式であつて、漢文で十五を十有五といふ例と同じく、必ずしも日常の用語とした譯ではなかつたらうと思ふ）二十に至りて更にトヲを單位としてこれに個數のツを付け即ちフタツツと呼んだのが、後轉略されてハタチとなり、三十のミトツがミソヂとなり、以下ヨソヂ、イソヂ、ムソヂ等とツがヂに通轉したのである、故に五十路、六十路などのヂは道路のチから來たのでなく、本義は個數のツであつたのを、チに轉じて路に事寄せ、其れより八十路の坂などゝ文學化するに至つたのであらう。

十を十倍したのがトド即ち百であるが、其をモモと呼んだのは、モの集まる音義に出たことは勿論であらう。さて五百八百のホはモモの轉略、千のチはチヂに碎くるなどのチで無數大量の形、萬のヨロヅは即ち寄個で、數量集積の極點である。次に人員を數ふるときのヒトリ、フタリのりに就て考へ見るに、是は在りの約略であらうと思ふ。即ち一人はヒトツ在りの約、ヒトタリ。更にタを略してヒトリとなり、二人は二ツ在りの約、フタタリ、更にタの一ツを失ひてフタリとなり、三人は三ツ在りの約、ミタリ、四人はヨツ在りの約ヨタリとなつたのであらうと思ふ。

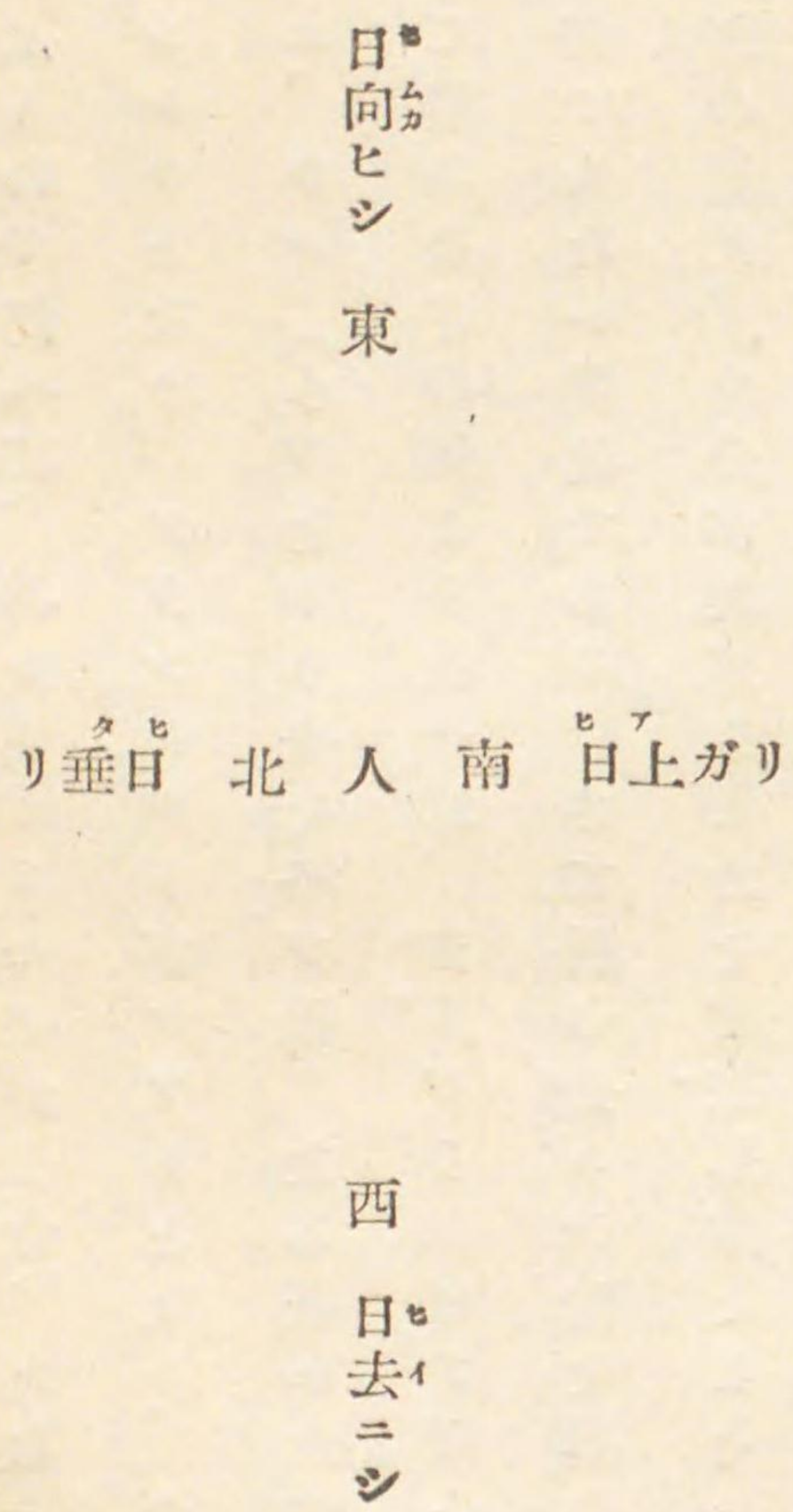
以上は著者の一家言であるが大體は堀翁の音義説に基づき、更に新意を加へたのである。國語の數詞については、從來内外の言語學者が解釋を試みたのも數々あるが、其の中に就き説の當否優劣は別とし、兎にも角にも首尾の纏りたる説を立てたのは、予の知るところにては故の堀秀成翁と今の白鳥博士との二家である。前者が其の獨得の音義説に據りたるは勿論であるが、後者も自ら明言こそせざれ、實質に於ては全く音義説側の解釋である。この二大家に對して予の第三説、餘計な無禮と思はぬでもな

いが、また捨て難き心地もするので敢て記し置く次第である。(古代扶餘族の數詞が我に同じとの説は未だ確證を得ない)

四 方位の稱呼

凡そ方位の名稱は何からつけ初めたかと考ふるに、自己の身を本位として、一は太陽の所在を指し、他は肢體の部分に當つる此の二種である。而して二種相交つて居るのも無いではないが、主として太陽を指したのが天地の方角即ち東西南北であつて、肢體の部分に基いたのが、自己の四周、即ち前後左右である。先づ天地の方角より言はん、支那では日が木の中半に昇りたるを東とし、鳥が巢に在る夕刻の意を西とし。東西は要するに太陽をその根據として居るが、南北は一轉して、肢體の名に取り前を南とし、背を北と稱して居る。去つて印歐語を検するに東は拉丁、希臘、サンスクリット共に夜明の意を取り(殊に梵語の *Ostina* は日本のアサに似通うて居る)西は夕刻に

見ゆる星の名を取つて居る。南は概ね日に縁あり、北は不明となつて居るが、蓋し左手に關係があらうといふことである。そこで我邦の方名はといふに、東は日向シとの舊説でよいが、西は去ニシ、即ち我が民俗が西から來た故との、今の學者の説は弱い、南は皆見、北は日足との古説も思ひ付きではあるが予の管見は今少し纏まつたものゝ積りである。即ち



日向ヒシがヒガシとなつたには何人も異議あるまいと思ふが、日上ガリがミナミと

なり、日去ニシがニシとなりたるについては非難もあらう。しかし言語の約略の力は随分強度に及ぶもので例へば、召シ上ガリモノが「飯」となり。今現在にてもハンカ―チーフがハンケチとなり、ブランケットがケットとなり、北海道の室蘭は、モ、ルエラン、ホーエ、ウシ（小坂を下り舟を呼ぶ義）なる長い文章が、今では僅二字四音の室蘭となつて居るなどの例より推せば、日上ガリがピアギとなり、ピアギ、がミナミとなる位は何でもない變化である。さて西の去ニシ説を排して、日去ニシ説を立つる所以は、國語の法に、自分が經來りし方をば來し方とこそいへ、去ニシ、方とは言はぬ例なる上に、東の日に對する連絡統一がなく、餘りに不具なる思想である（西を去ニシ方といふならば、東は向フかたとか指ス方、行クへとかいふべきであらう）

（因みに記す金澤博士の説かれた琉球にては北方を西と呼ぶ、これ琉球人が北より南へ去ニシ故なりとあり。予琉球人に就いて質すに北風のことのみをニシといふ、北の方角はヤハリ北といふといへり。）

右の表は専ら太陽に根據した命名法であるが、更に支那に於けるが如く、東西を日に取り、南北を身に取りて名づけたものと解釋すれば

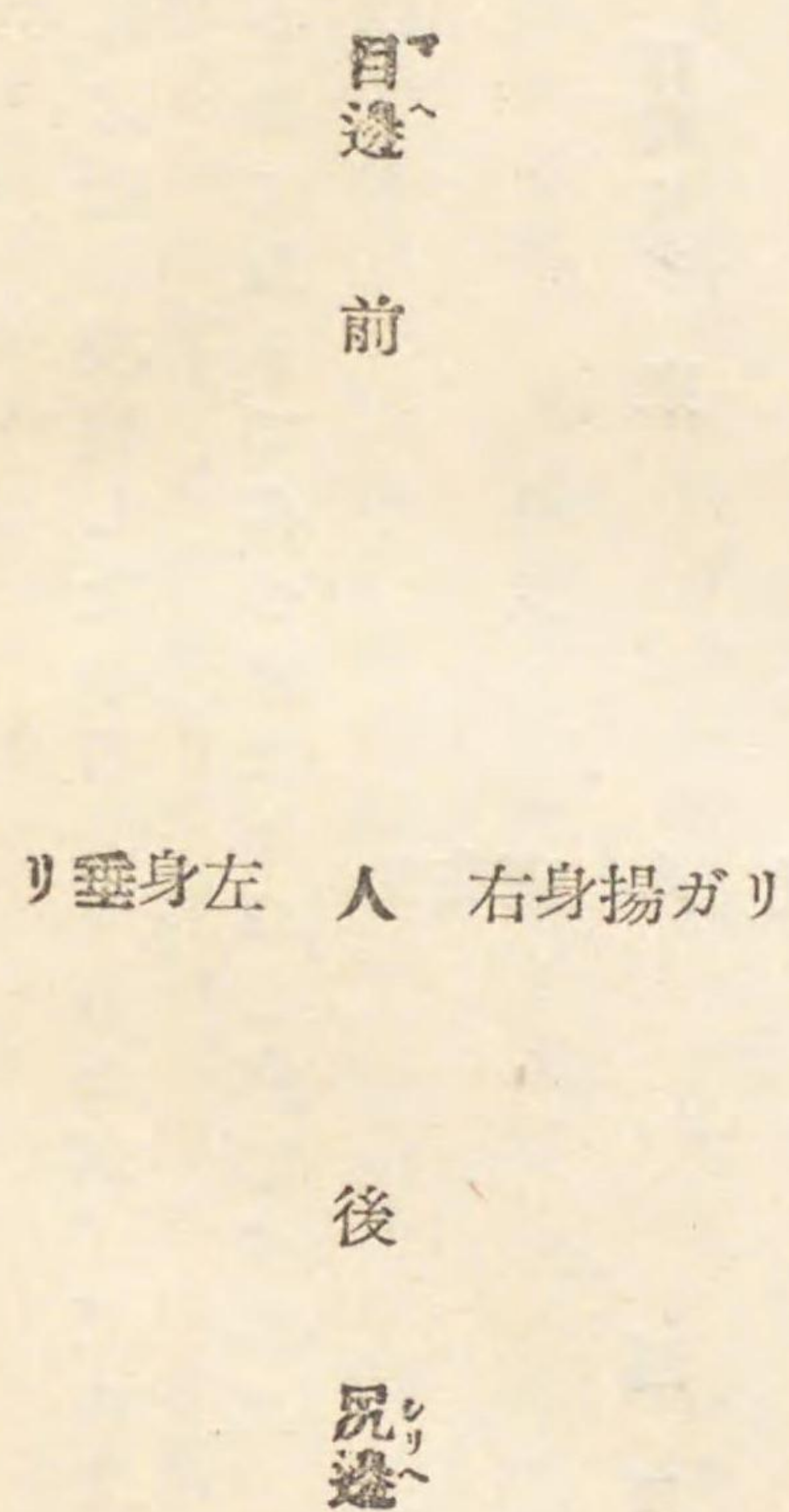
	日向ヒシ	東	
	人		
南右			西 日去ニシ
北左			

となるが、ミギリがミナミとなり、ヒダリがキタとなることは、極めて容易なる變化であらう。

却説歴史を見るに、日本書紀成務天皇紀に、五年以テ東西ヲ爲シ日縦、南北爲シ日横、山、陽曰影面、山、陰、日ニ背面、とあり、この文を玩味するに日の縦のことは別に名がなければ、蓋し在來の東西の稱をそのまま据ゑ置きしなるべく、日の横には名を命じて山陽（陽は山阜の南、日に向ふ方）を影面といひ山陰（陰は山阜の北、日に背く方）を背面と

いふとあれば、南北には元と在りし名を改めたのか、乃至新に名を創めたかは不明であるが、兎に角南を日光の表面（影は日光を指すとして）北は其の背面といふ意味から名づけたのであらう。然るに是は一時のことであつたと見えて、其の後の記録に影面、背面の名は見えずなり、後世の今に残つて居るのは、ミナミとキタの稱呼であるが併し要するに上古の風が、専ら太陽を根據として方名を設くる習慣であつたことは右の記事にても知らるゝであらう。

次に前後左右のこと、是は専ら身體の状態から取つたのである。即ち



前と後とは異議はあるまい。右左に就いては少し説明を費すを要する、其は斯うである。凡そ人類が皆右利きであるのは胸の左側に偏在する心臓を保護する爲に、毎に右手に武器を採りて、敵を防いだからであるとの學者の推測は至當と思ふ。そこで右に武器を採れば當然右身が揚がることゝなり。右身が揚がれば左身が垂ることゝなる。この一上一下の状態に依りて右を身揚ガリノ方と呼び習はしたのがやがてアを失ひ、ガがギに轉じてミギリとなり、身垂リは全體をそのままに存じて唯ミがビ又ヒに轉じたるに止まつたものと思ふ。

衣服の衽を左にしたのも、全く右の關係からのもので、即ち右手には敵を防ぐの重任があるから、其を懐に入れて物を捜すなどの追がない爲で、又後世右衽となつたのは、人道文明が進歩して、最早平常對敵行爲の準備を繼續するの必要が無くなり、左様なつて見ると、働き手たる右手を以て、懐に出入さするのが、都合が好いといふ爲であつたらうと思ふ。

然るに茲に注意すべき一事は右と左の位置の上下のことで、我邦では左を上席とするが支那其他多くの外國では右を上席として居る、其の意味は我邦にては徳を貴ぶ故貴人を左の方に擁護し、臣下が右に出で、敵を防いだからであり、又外國では一に力を肯ぶ故、右に進んで敵と闘ふ強者が上席を占め、餘人は左に下つたのであらうと思ふ。是は一小事の様ではあるが、しかし唯此一事を以ても我邦では皇徳を尊んで萬世一系の國體をなし、他邦では専ら力に依つて相争奪する所の代朝革命の國體をなしたる、各國々體の淵源を窺ひ知ることが出来ると思ふ。

以上方位の事を説いたが、前後左右も東西南北も、縦と横と對々の語法で名づけられてあるは同揆である。

縦の對 東、日向ヒシ 西、日去ニシ 前、目邊 後 尻邊

横の對 南、日揚がり 北、日垂り 右、身揚がり 左身垂り

茲に前後を指す語の中に、配偶を失ひて孤獨となれるウシロといふ一語がある。段

段素性を調べて見たるに、是れは純系語の實子にあらず、埃乃語から來た、養子語なるべきことが分つた。即ちウシロは埃乃語で醫の意である。

又左右を弓手、妻手といふ後世語があるが、弓手は字の如く弓持つ手といふ意味であらう。妻手は弓とは關係なく、唯女は右といふ所より、男の左に對して女手と呼びたるが、いつしか弓手と相對する語となつたのではあるまいか。然らば弓手、妻手ともに正字と見ることが出来るであらう。

又方角に依る風の名稱、西と北とは方位名そのままであるが、東と南とは別となつて東をコチ、南をハへと呼んで居る。ハへは颶風をハヤテ(早風の義)といふ、其を約したものかと思ふ。といふのは我邦の大部分に於て、大風は主に南から吹くから自然南風をハヤテ、ハへと呼び習はしたものであらう。然るにコチの見當が着かぬ。段々想像を繞らして見ると、是は上古出雲繁昌の時代に越の地方と往復するのに、越は東に當るから、東の風を越風と呼び、それがコチとなつて残つたのではあるまいか。

是は勿論憶説である。又西北の風をアナシといふは、西北風は概して晴和を兆する故に荒無シの意から來たのではあるまいか。元來風をハヤテ、オヒテなどテといひ、又ツムデ、コチの如くチといふはカゼのセの轉訛であらう、舊説風をシといふといへるも其の實はセの轉であらう。風をチといふの例は安藝浦刈嶋、倉橋嶋邊にて南風をマヂ、東南風をヤマヂといふ。ヤマヂは山の方より吹く故といふが、マヂ（眞風）は此の邊の最多風が南風であるといふのではあるまいか。ヂが風の意なると勿論である。

然るに右記載の後、長崎縣五島に遊びて、更によいことを聞き出した。彼の地方にて東南風を、「オシヤナバヘ」又「オサナバヘ」といふより考ふれば、則ち東南風は「稚ナ南風」で南風の尙幼稚なる意味であらう。又西南風を「下リ西」といふより推せば、西北風のアナシは「上リ西」の略であらうと思ふ。前にも言うた通り我邦多くの地方の風雨は西から西北に廻れは霽れるのが常である。そこで風の方位名を列記すれば、

コチ 東風 越の轉か

ヲサナバヘ（方言） 東南風 稚ナ南風

タツミアガリ

ハヘ 南風 早風の約

サガリニシ（方言） 西南風

ニシ 西風

アナシ 西北風 アガリ西の約

キタ 北風

ウシトラ 東北風

又舟の方位名に、艦をニヨシ又はミヨシ、右を面楫、左を取楫といふ語がある。これに就いて幼時、父より聞きたる説にニヨシは子押しで舟の艦を北に向けたるをいふ。右の面楫は東の方にて卯ノ楫なり、左の取楫は西のことにて酉楫なりとあつたが、未だ典據を見當らぬ。

六 年月日時

年月日時の名稱にも、解し難いのが幾らもある。先づ年のことから言はうに、今年コトシは無論『此年コトシ』であらうが一年前なる去年の『コゾ』は何であるか、或る舊説には去歳の音とあるが、是も有るべからざることでもない。しかし其よりも勿ナ來コソの來ソの略で『來ソ年』と見た方が、稍々近いではあるまいか。唯昨日との類對を得ざるは遺憾であるが、今日のところ其れ以上の見當はつかぬ。去々年、一昨年オトドシは堀翁説の『彼ツ年』も捨て難いが、今も俗には去年のことをアトフトシといふより察すればコゾの今一つアトフトシといふ意でアトドシではあるまいか。年については右三個年の外、本來の成語は無い。(コゾは或は來ズ年か)

四季の名は春晴ハルハル、夏熱ナツアツ、秋明アキアキ、冬冷フユヒユなるべきこと前章に説いて置いた。次に月のこ

睦月ムツキは 産月ウツキ 年を産む月

如月ニギハキは 衣更着ウツラギ 尙寒き故に

彌生ヨシキは 字の如し

卯月ウサギは 空木ウツキの花咲く頃

卯を周曆の卯に當る故と見るはわろし

皐月サツキは 早苗月サツキ 稻をサ又はセとと讀む例多し

水無月ミヅナヅキは 熱高く早多し 或説水之月、田に水を溜むる故といへるはいかど

文月フミツキは 七夕に文事を弄ぶより

葉月ハヅキは 落葉始まる

長月ナガツキは 夜長を覺ゆる

陽月カネツキは 陰極まりて陽生する故といふ舊説はいかど。諸國の神(守頭即ち地方長官)が出雲に集まる故に神無月なりとの説、價値あるを覺ゆる。

霜月

結霜著し

極月

舊説僧侶が走る故に師走月なりといふは最も悪い。これは時節柄をそのまゝの『忙月』であらう。

右十二個月の別名（或は本名なのもあるか知れぬ）雅俗混淆、玉石同架で且その命名の根據にも統一がないが、兎に角自然に言ひ習はしたる俗説乃至好事家が作爲したるを取り合はせたのであらうと思ふ。が概してその文字よりも、訓方に重きを置くべきものであらう。

さて月始の朔日は月立ち、月末の晦日は月籠の轉略であること論無しであらう。月については去月來月の純系語の名稱は無い。

次は日の事、先づ今日のケフは來徑、キノフは『來經ノ日』の轉といふ堀氏説尤であらう。ヲトトヒは跡ツ日と見るがよい。明日のアスはアシタ（朝）の略轉で、即ち次の朝といふ意味であらう。東美濃邊で明日の事を次グノ日、翌朝のことを次グノ朝

といふなどまた参考すべしと思ふ。明後日のアサテはアスアト即ち明後の約轉か。或はアスアリテの約か。これで日の名は解けたと思ふ。

次に時間上の前後のこと、前後去來の名は、時間空間に通用するもの多いが、中に一方のみに用ゐて、絶対に他に用ゐざるものもある。左に

(イ) 時間空間を通じて用ゐるもの

マヘ(前) アト(跡) サキ(先)

ユク(往) キタル(來) サル(去)

(ロ) 時間のみに用ゐるもの

ノチ(後)

(ハ) 空間のみに用ゐるもの

シリヘ(後) ウシロ(後)

尙注意すべきは、空間に於ては前後去來を各其の反對の意に流用することを許さな

いが、時間に在りては其を無差別無制限に流用することである。即ち

未來も

過去も

往ク末

往ニシ

來ル、來ム

來シ方

先キハドウナル

先ツ頃、是ヨリ先キ

跡ガ思ハルル

跡月、跡ノ年

是ヨリハチ

去ル、六月

の如くで、唯ハチと去ルとの二語を除きては、皆悉く前にも後にも、過去にも未來にも流用せられて毫も障碍なしであるが、之に反して空間に於ては斷じて之を許さざるは、何等の理由に基づくのであるか、空間の觀念は比較的確實にして、時間の觀念は空漠、不確實といふ爲であらうか、一の研究點でもあらうと思ふ。又ハチといふ語が姉妹なく孤立して居るのは、空間に於けるウ・シ・ロと共に、一の曲者ではあるまいか。

或地方にて己が君の家へ往クといふことを明日『來ル』などいふことがあるが、往ク、來ル、を空間にも流用したる例外であるか、乃至は一地方の訛誤であるか未詳。

第三章 語原より見たる衣食住

言語の研究によりて、記録及び發掘物等の證明以外に、古代民族の生活状態を察知することが出来るは勿論である。されば歐米の學者が、この方面の研究をなしたるもの少からぬが、我邦にても文學博士金澤庄三郎氏は「言語の研究と古代の文化」なる一書を日獨兩文で公にして居る。予が語原の研究は、元來是等に應用することを主たる目的の一として始めたのであるが、茲に掲ぐるは其の中なる上古の衣食住の状況の一斑である。固より簡單なる記述であるから、他の各種の條件と比較研究するの餘裕

なく、唯單純に語原の研究より見たる状況を語るに止めて置く。随つて此一文が史學考古學人類學等の斷定を裏書することもあらうが、亦裏切することもあらう。或は又是等諸學の説明の足らざる所を補ひ裨くることもあらう。兎に角卒直に述べて見る。

一 衣服

衣服はモ(裳)といひ、ソ(衣)といひ、ケン(衣)というた。そして裳からコロモ(着ル裳)袴(穿ク裳)紐(引裳)などが出来、ソ、から袖(衣手)神衣などの語も出来た。帯は勿論、カウブリ(冠)があり、襪(手隙)があり、履があり、襪もあつたであらうが、タビといふ名は和名鈔には單皮とあるけれども自分は沓の字音から来たものではないかと思ふ。又袴は歩くときに都合がわるいので、布を以て膝の下邊を縛つたが、是れが足結ビといふもので即ち歩ムの語原である。次に隠れたもので重要なものは、即ち犢鼻褌であるが、諸尊御身褌のときの褌はどんな形のものであつたか、

褌は和名鈔にはスマシノモノ、チイサキモノ、又は「裳ノ下ノ手塞ギ」など註してあるが、其は果して支那式の所謂犢鼻褌(今三尺の布、之を作る、形、牛鼻の如しとあり)であつたか、日本式のフドシであつたか不明である。抑々日本式のフドシ、即ち五尺五寸左右の縮込は、大和民族が熱帯に關係あることを證する大なる特色の一である。喜田博士は諸尊御身褌の記事に依りて天孫種族(予のいふ天原人種)はフドシを用ひなかつた様に説いて居らるゝが、其は早計であらうと思ふ。予は諸他の事情から推して、縮込のフドシは、天原人種本來の所用であると信するのであるが、フドシの語原は陰襲ホドオスヒの約轉ではないかと思ふ。

以上で全身を繕ふところの衣服は一通り完備したが、次に装身の具は第一が玉で、頸に頸玉、手に手纏テマキ、を捲き、尙鬘カウマツ、にも耳蔓ミミヅラにも着けたのである。鬘、耳蔓も各主たる装飾の一つで鬘は即ち髪に捲く蔓カウマツ、耳蔓は耳に飾る蔓である。耳蔓は男子の髪カウマツの装飾であつて、女子は髪を結うたのであるが、女子のみが用ゐる領巾といふものは、

今の所謂ハイカラ婦人が、肩に掛くる綾羅の裂レと同じく、襟の處に捲いたのである。そこで衣服の材料はといふに麻布、綿布、絹布の三種で、麻布は麻の類、綿布は穀(棍)楮から取り、絹布は無論蠶から取つた。綿布は即ちユフで結フと同じ語根であるが、繭は眞綿布であらうと思ふ。絹は生布。生糸はイキイト、眞綿は後世草綿が這入つてから、之と區別する爲に名づけたのであらう。又楮の語原は神衣で神に捧ぐる衣を織つたのであるが、後に朝鮮から製紙工が這入つて來たとき、紙を楮皮と書く其の文字を取つて、乃ち其をカミソと呼んだのが、やがてソの字を脱落して、カミとなつたことが察し知らるゝので、舊説の所謂紙は書キ見ルの略といふのも、金澤博士の簡の字音といふ説も共に誤謬であらうと思ふ。

右は何れも織物のみで、今見る様な綿が無い。然らば綿入は無かつたかといふに然りである。然らば毛皮を着たかといふに左様でもない。尤も少彦名は蛾の皮を丸刺にして着て居たとあるが、是は羊の皮であらう。ヒムシ、ヒツジは通音である。しかし

彼は神御家の落胤か何かで胤は天原人種であるが、生れか育ちかは韓滿の方なので日本語が通ぜぬ位であつたから、勿論彼地の防寒衣を纏うて居たので、我等が祖先の尋常の被服には、毛皮も毛織もなかつたのである。之を概活して考ふるに、我が上古の服制が完全にして且つ優美であつて南洋土人などの裸體若くは半裸體なるのと、比較されざること勿論であるが、しかし寒國式でなく暖國式であつたことは種々の點に於て知らるゝのである。

一一 飲食

主食物は飯であるが飯は生、息の分化である。飯は何で造るか、稻即ち飯根で造る。稻の實が裳實(粳)其の殻を去つたのが米、米は籠實、又小實濃實と見ることも出来るが、寧ろ腹に籠むる込であらう。即ち腹に込むる込物の代表者が米で、コメが約まつて饌となつた、又ヨネの名は稻の轉か齡の根か、どちらでも差支ない兎に角米は我

が民族の生命の根本で、瑞穂の國も、秋津島も、これから呼ばれた名稱である。されば米無き處には安住出來ず、北海道に米作が成功して、移民始めて墓を築く者多く、又樺太を取つてから十年かゝつて彼の窮北の寒帯に米を結實せしむるを得たほどで、洋行中に病氣をして、百薬咽を下らざる瀕死の場合に、米の重湯で復活するのは事實である。

米の次には淡々したる粟、涼しい稷、キビくしたる黍、殊に圓滿愛好の意味なるマメ、豆を賞用したが、麥は其の語が朝鮮音メクの轉なるより察するに、多分濕く採用したるものであらう。玉蜀黍などは外國の意なる諸越の上に、今一つ唐を被せたる程なれば一層後世の舶來なることは疑ひなからう。

次に副食物は何ぞと尋ねるに、凡そ物に添ふものをナといふ。花の葉ナ、人の名、物の名、皆ナである。さて食物の類でナと呼ぶものは蔬菜全體が皆菜である。故に音讀して一切副食物を御菜ともいひ亦おカヅともいふが、カヅはカツ（加ふること）で

同じく添ふる意味である。就ては祖先の副食物は主として蔬菜であつたことが知らるゝので、其の次には魚がナである。しかし是は一般の常用でなく、格別馳走の場合のみに用ゐたので、即ち特別上等の意味でマの字を被せて眞菜と呼び以て蔬菜と區別して居たのである。恐れながら雪の上では、魚をウヲ（ウオは魚の字音）ともサカナとも仰せられず、必ずマナと呼ばせらるゝ由であるが、民間でも俎板と、俎箸だけは、今もマナの名を留めて居る。

次は鳥獸の肉であるが、祝詞神饌の献立にある、毛の和物は鳥、毛の荒物は獸（毛ノ荒物が、ケナラモノとなり、ケナモノとなり、ケダモノとなつたので和名鈔に野獸をケモノ、家畜をケダモノとしてあるのは不可と思ふ）で、何れも用ゐたことが知るゝが、しかし、肉のことをシンといふ、其のシンの名を負はせて居るのは、猪鹿の二種に過ぎざるより見れば、祖先は農業上の害敵たる、この二獸のみを食したことが察せらるゝ。牛馬は本來食用にあらず、専ら農耕勞役用として輸入したのであるから、

之を食ふことは嚴禁であつたことが記録にさへも見えて居る通りである。(我が民族は、食用獸牧養の時代を經過せず、狩獵期から直に農業期に入つたのである)

そこで副食物の調味料は何であつたかを考ふるに、第一に鹽である。是は早くから一般に用ゐたと見えて、單にシホと呼び翻つて海潮を是から區別してウシホ(海潮)と呼んで居る位である。鹽が更に人工を加へられたのがヒシホ(乾鹽)で、是は、穀物野菜等を鹽漬にしたものらしく、其の特に發達したのが、味噌と醬油とになつて居る。味噌は中古に未醬と書き、或は高麗醬とも呼び、文書の上では朝鮮傳來の如くになつて居るが、語の上より解釋すれば、是は却て日本が元祖で、逆に韓漢に及ぼしたものであらう。といふのは味噌も醬油も元と同語で、即ちヒシホである(此の點は新居白石も同説)ヒシホがヒシヨとなり、ヒソとなり、ピソ、ミソとなつたことは解し易い。さてミソを造つて用ゐて居たのがいつしか其の中の液を取つて豆油と名づけ(今も美濃地方では溜タマリと稱する)凡そ足利時代から醬油と名をつけ、尙方法も益々改良を加へ

味噌以外に最初から醬油として醸造するに至つたのである。故に味噌と醬油とは元ヒシホの一名一物が、終に二名二物となつたので日本が元祖といふとが出来る。別て醬油は愈々進んで終に國際的のものとなり、醬油の訛なるソイの名は西洋の辭書に乗る程となつたのみならず、世人の多數が全く正眞の舶來と思つて珍重して居る、かの酸味ある所謂ソースは、是は専ら東洋向として英國で特製さるので、其の元、日本醬油が印度洋を渡つて洋行したとき酸敗に傾いて居たのを眞似たのである。西洋諸國で用ゐるソースは、全く是と違ふのである。是を思へば、元と此方から出たものを、外國傳來と誤つて居るのは、他にも例あることであらう。

肉の鹽漬がシンビシホ(醃)で、是は魚鳥ともに用ゐたらしい。

甘味の料は飴即ち甘飯アメイの約で、一名タガネは束ねた形をいうたらしく、即ち後世の菓子である。

次に來るは飲料であるが、これは平常水を飲み、尙嗜好料としては酒を用ゐた。し

かし酒をばキ、又はクシといふたが、其のキ、又はクシはクスリの約で、即ちクスンキ奇妙不思議のもの、藥劑の一種と思惟したのである。是は古印度リグヴェダの法典に、酒を神聖なるものとしてあるのと同じで、太古の民族が之を飲んで、一種の靈物と思つたのは尤もである。其の事情は今日に遺りて、酒を百藥の長ともいへば亦狂水とも呼ぶのである。

サケの名は後に出來たのであるが、精細なる意のサをキに付けてサキと呼んだか、又は酒の字音を冠してシユキといふたのが、やがてサケと轉したのであらう。

果實は桃栗柿等で葡萄も蝦蟇エビカマと稱して古くからあり、橘も田道間守タチマノモリ以前から在來種はあり、田道が輸入したのは新種類であつたであらう。梅、杏、林檎、梨子（秦子）等、字音をそのまま名づけて居るのは、概して後世の舶來であらう。

三 住居

上古時代の住居のことは、最近にも喜田博士のが其の機關雜誌「民族と歴史」に出て居り、從來諸家の考説もあれば記録もあるが、茲には此の書の目的範圍内に於て唯單純に語原研究の上より觀察したる有様を述べて見る。

住居の元は巢である。巢は字書に木に在るを巢といひ、穴に在るを窩といふとあるが、スは精密進銳の音義で、巢は即ち其の構造の精巧なる意味から名に負うたのである。然るに巢では鳥が先輩で、人間は要するに鳥の巢を學んだのである。そこで我邦では人間の家も巢と稱し、古事記大國主退隱の條にも「トダル（戸足ルか）天の御巢ミノノなして」又「トダル天の新巢ニホノ」とあり、御巢は皇居をさしたので、新巢は大國主の新殿である。随つてスなる言葉が永久的に、我等の住居を支配するに至つた。即ち住ム、棲ム、栖ムは皆巢ムである、住マヒ、住居スミヤは巢マヒ巢マ居である。育ツは巢立ツ、養ムは鳥の羽含ムである。さて巢から來た家の構造はといふに、家の至要部は屋根である、既に巢があつて其を尙完全なる家となすに先づ必要なのは屋根であるから、即ち其

を家の根と名づけた。ネは物の主たる意であるから、草木の根は下方の土に在るけれども、家の根は上方の空に在る、その屋根を葺くのがカヤ即ち被家、被家に用ゐるのが茅草であるから、茅草を一名カヤと呼んだ。茅草を被せて、其を締むる爲に、木を交叉したのが茅木で、是が轉じて衡器のチギ、契約のチギリの語根となつた。其から茅を交へて組み合せたのが茅交フの誓フ、其が濁りて強められ、行き過ぎたのが違フである。斯様に屋根の材料たる茅が、有形無形の言語の上に大發展をなしたるを思へば、當時如何に屋根と茅とが重んぜられたかを知るべきであらう。

茅木り、茅交ヒで固めた家根を更に綜合統一して、確定不動と押し鎮め壓へ付けたのが、人間全身の元たる心、胸、即ち身根と同語根なる棟である。前記各種の語から見ても、以て上古の我が民俗が、巢に親しんだことが知らるゝであらう。

次に殿は戸内である。戸はトダル天の御巢とある如く、巢式の家屋にも必要であるが、天の石屋戸とある如く、穴式の家屋にも必要である。而して史書に天石屋戸とい

ふがあり、祝詞にも天の石座放ちとあれば、穴式の家もあつたらしく、今も信州諏訪邊に於て、冬季堅穴式の仕事場を設くる風俗がある。そこで祝詞や史書に所謂、底ツ磐根ニ宮柱大シリ、高天原にチギ高シリテとあり、八尋殿、忌服殿とあるのは、巢式の家屋で、石屋戸とあるのは、多分穴式の、而も横穴式であつたらうと思はるゝのであるが、兎に角巢式が主で、穴式は副であつたかと察せらるゝ。

尙巢式の屋根の上に、茅木の外に鰹魚木又葛緒木があるが、鰹魚木の名は後のことで、元は加ツ木であつたかも知れぬ。是は皇居に限らるる制度があつたと見えて臣民が侵すを罰せられたことが、古事記雄略天皇の條に出て居る。巢式家屋の發達したる形狀は、畏れながら伊勢大神宮の御社殿を以て、上古の面影を髣髴すべきであるが、尙馬來半島を始め南洋諸島の間では、土人が、多く是と同形の家屋に住んで居るのを見出すことが出来るのである。

以上語原の研究から見た衣食住の一斑に依りて觀察すれば、大和民族の生活が寒國

式でなくて、暖國式であつたことが知らるゝのである。

第四章 語原雑話

一 花とフラワー

明治三十七八年の交、約一個年ばかり、韓滿の間に往來したことがあつた。或日仁川の丘上に登つて彼方此方と逍遙する際、フト考へたのは、花といふ言葉のことであつた。邦語でハナといへば櫻は勿論、百花繚亂の春色を連想する。然るに韓語で花をコツといふ。コツでは幾度繰り返へしても花の感想は出て來ない、如何にも朝鮮は花の無い國である、自然の上にも人文の上にも先づ花の無い國である、コツといふのも無理は無いかと、斯う考へて徐ろに憐れを催ほした。ソコで序でに隣國のことを思ひまはして見ると支那語では花をフアーといふ、これもハナと似通うて花らしくある。

英語のフラワー愈々爛熳たる薔薇の花が目に見え。果實の花をプロツサム、如何にも牡丹芍薬のフラワーと異なり、言葉からしてサネくしく、襟の控鈕孔に挿む様な感じが起らぬ。是に於て思へらく、夫れ言語には形象あるか、ワタと呼べば綿が現はれ、ガイコツといへば骸骨來る。習慣に依ること勿論と雖も、豈に獨り其のみならんや、必ずや習慣以外に思想と發音、發音と言語。言語と思想行爲及び物象等自然的に相連絡し、關係接続し、或る一定の序列をなして進行し來るところの、已むべからざる約束あるかと。これ實に自分が言語の研究に興味を持ち初めた動機であつた。

其後四十一二年頃であつたと思ふ。小石川植物園で小野蘭山の百年祭が催されたとき、松村任三博士が日本語は支那語の一部なりとて、其の草木名の類同語を表示説明されたるに對し、當日の齋主たりし故藤岡好古翁が、其は各國の語皆同じき筈、元と發音の形象に依る故にといふことを座談の間に述べられた。そのとき自分はハ、ア我が考案の先輩ありしかと喜び、程なく翁を日比谷の邸に訪うて其の説を聴き、指導を

受け、且堀秀成翁の遺稿を借覽し、其の大部分を謄寫した。其から坊間の新舊書籍類をも搜し集め、又歐米人の著書をも取り寄せて、比較研究に没頭し終に淺學幼稚ながら、日本語原の法則を組織し、この書を著はすに至つたのである。

花より木の實の諺もあるが、自分が語原の研究に入りたる動機は實に花よりのことで、此の書並に次に上梓すべき語原辭書は、其の結實の一つである。

一一 鷹と乙鳥

是は堀翁の遺稿の中に在つた笑話であるが、不完全なる解釋法の一例として茲に拜借する。昔語原の解釋上に延約通略説が跋扈した頃、京都に於て其を講ずる、學者先生があつた。生徒を集めて教授して居るところに一生あり問うて曰く、延約通略説、命を聽けり。然らば鷹と乙鳥とは同物なりやと。先生ケゲンな顔して曰く、然ることなし。一生曰く、しかしツバの約はタといはずや、先生曰く然り、クラの約はカにあ

らずや、師曰く然り。一生聲を勵まして曰く、ツバはタ、クラはカ、タカは鷹、即ち乙鳥は鷹にあらずや。先生辭なくして止むと云々。

丁度漢字について甲某が字といふものは好く造つたものぢや。水の皮と書いて波と讀む。支那人は實に智慧が多いと。乙某傍より嘲つて曰く、然らば滑は水の骨かと、甲某答ふること能はざりしといふ滑稽談と同日の笑話である。

一二 餅と歌賃

語原の研究に關して世に俗説語原なるもののあることは、各國ともに同様である。今其の一例として餅をカチンといふことの解釋を紹介する。

正徳中に出版されたる肥後井澤長秀著、『廣益俗説辨』といふ書に曰く、餅をカチンといふことは、俗説にいふ婦女の言葉に餅をカチンといふことは、むかし早魃のとき土民等能因法師をたのみて歌をよませけるに忽ちに雨ふれり。土民喜びにたへず、餅

をつきてもてなしければ、能因これは歌賃かといひしより餅をカチンと呼び來れり云云。

是が在來の所謂俗説であるが、該書の著者之を辨じて曰く、今按ずるに此説非なり（中略）惠命院僧正『海人藻芥』に云ふ、内裏仙洞には一切の食物に異名をつけて召さる、酒は九献、飯はくご、餅はカチン味噌はむし、鹽は白物と見えたり。黒川道祐曰く中古衰世の時、褐塵の服を着たる者、餅を圓曲の器に盛り、頭上に戴きて禁垣の内に賣る。内裏の女子、褐塵と呼んで之を買ふ、其後婦人直ぐに餅を謂ひて褐塵と曰ふとあり。是等を考へて俗説の非を知るべし云々。

所謂俗説の非は勿論であるが、其を排して取つて代りたる正説なるもの更に一層入念の俗説である。カチンは搗飯の約轉であること疑ふの餘地なく、大槻博士の言海にも出て居る。

物名はまだしも所謂地名傳説に至つては、概して傳會の妄説であつて、中にはその

俗説に依つて故意に地名を偽作したり、小説を種として逆様に、石碑其他の遺物遺跡を製造したのも少からずである。傳説俗説の中には往々にして眞實を傳ふるものもあるが、多くは學術の開けざる以前 人智の程度の低かりし時代に、作爲したるものであるから、餘程選擇に注意せねばならぬ。

四 オヂヤと落雁

雑炊飯をオヂヤといふこと蓋し越後の小千谷が本場で、小千谷粥とか、小千谷飯とか呼んだのが、やがてオヂヤと略されたのであらうと想像し、其の方針で搜索すると年久しく、新潟縣に遊ぶことに、人々に問うても要領を得ず、先年幸ひ小千谷を歴たので、古老に就いて問ひ質すに、彼地にては雑炊をば、ヤハリ世間なみに雑炊と呼びてオヂヤといはざるのみならず、小千谷の地名すらも近世のことにて、他に千谷といふ所あり、其に區別する爲につけたる名なりといふことを聞きて、この方針は終に

絶望に歸した。然るに和名鈔飯餅類カシヤカチに鈕飯、唐韻に曰く、鈕は雜飯也とある、其の鈕の割註に女救の反、字亦糝に作る、和名加之木賀天とあるより考ふるに、右のオヂヤは或はこの糝チユウ、オヂユウの轉ではあるまいかと思ふ。元來雜炊雜飯は我邦固有のものでないところから推しても、蓋し左様かと思はるゝのである。

因みに記す、我が舊里の小兒の語に、汁をジュ〜といふことあるがこれも汁の字音に關係あるにあらざるにや。

又落雁といふ菓子の名は最初雁の形に造つたのが、漸次種々の形に及んだ、けれども名だけは元の通り落雁と呼ぶのででもあるかと、唯軽く想像して居たるに、先年加賀の金澤で見た書籍に依れば、落雁は同所の名産であつて、昔藩侯が、禁裡仙洞に奉獻したるに、辱くも

後水尾上皇御覽あらせられ、白色の地に黒胡麻を撒きたるさまをば、落雁に似たりと御意遊ばされければそれより畏くもその御詠をこの菓子の名に負はすることゝなり

たりとあり。始めて眞の由來を知り得て、大に喜んだことであつた。

五 探題と問答

長崎にて老人の言葉に物を取調べることをタンダユル(探題)といふのを聞いたことがあつたが、謡曲安宅に、兎角の是非をば問答モシダはずして云々といふところがある。語尾の母音變化に依つて、外來系語の名詞を直ちに動詞に轉用し、毫も不調和、コヂ付ケの跡を感じしめざるところ活用の妙を得たるものと申すべきか。

六 把笏と神變

俗に宴會などにて跋扈すること、又物の乾燥することをハシヤグといふが、嘗て中古の國史を閲する中に、何某一郷の把笏ハシヤグたりとの文句を見た。即ち一郷の權勢家なりといふの意で、件のハシヤグは是から出たのであらうと思ふ。

予の舊里地方にて、普通『好うこそ』といふべきところを『ジンベン』といふ方言がある。或時、上方下りの客僧、足袋の洗濯を檀家の女房に頼みしに、彼女は足袋の小なるを見て『ジンベン貴方の足に合ひます』と言うた。客僧ハ、ア足袋のことをジンベンといふかと速了し、次回に洗濯を命ずるとき、曰く『ジンベン』が汚れた。このジンベンは神變であらう。不思議にといふ意味に其の使ひさまが合つて居る。

七 如才存在腕白等

「如才無イ」は神を祭るには神在スが如クスの如在であつて「ナイ」は「無イ」にあらず「ナル」の「ナ」即ち如在ナであらう。即ち謹み慎みて用意周到一點の遺漏なきをいふのである。又存在は「鈍才」の轉か。鈍間はノロマの轉「ドロマ」が再轉したのであらう。而してノロマの語原はノロイ（遲鈍）間の複成語で、即ち「鈍間」と同じである。

又所謂腕白小僧の「ワンパク」は未ダ典據は見當らぬが恐らく「蠻貊」の轉であらう。

八 樽と酒

謡曲に樽をタルといはず、ソンと呼ぶ、その元と思はるゝは和名鈔に樽は音尊と同じ、和名無しとある。就ては少くとも中古迄はタルの名稱はなかつたのである。又謡曲にて酒をシュといふところ多くサケと呼ぶこと少いが、これにも何か事情のあることではあるまいか。其他謡曲にては曉をアカツキ、懐かしくをナツカシと必ず清みて讀み、嶽をダケと必ず濁りて讀ますなど、普通に異なる讀みくせがあるが、其は音節語調の関係にも因るべきこと勿論ながら、別に歴史的、寫實語の名残りが、無意義に保守されたものではないかと思ふ。

九 本所ご大阪

地名などの文字が普通と異なりて讀まれ、若くば發音さるゝところには、頗る注意に價するものゝあることが多い。東京土人の間では本所の所を長く引いて、即ちホンジョオと呼ぶのが例であるが、是は本所が元と下總の本庄であつたが、武藏に分合された後、武藏本庄は別に在るので一國に二個の本庄があることゝなりて紛らはしきより、江戸の本庄を本所と書き改めた。けれども其の發音だけは、元のまゝを留めて居るといふ、本所の歴史を語つて居るものと見ることが出来る。本所と本庄と固より相通用し得べきものではあるけれども、彼の氣短かな生拔の東京兒が特に長たらしくホンジョオと引張るところが面白い。

之に對して悠長なる、生拔の大阪人は、オオサカといはず、オサカと呼ぶ。然らば彼等は、多をオオといはず、オと詰むるかといふに、否な、他と等しくオオと讀む。

而して獨り大阪の地名のみを、短く詰めてオサカといふ。是には何か仔細があらうと調べて見ると、昔は生玉の庄小坂コサカの里であつた。

或部分の人は女郎を必ずデョオロと、上を引いて發音する、是も恐らく意味あることとて昔平家の女官達が、赤間ヶ關に生き残りて、憂き年月を送らんとて、花賣る業を始めたのが、遊女の起原の一なりといふ俗説などより考ふれば、所謂デョオロは上藹の意味かと思はれざるにもあらず。是につけて伊賀名張郡某の村(今村名を忘れたり)にて、女郎塚なるものあり、庶民渴仰する由を聞き、如何なる遊君の墓ぞと問ふに、その事更に分らずといふ。依つて思ふに是れ遊君の女郎にあらず、所謂女郎塚とは、公卿の上藹の古墳ならんと推測しながら、追なくして實地を見ずに歸去せしことあり、此の邊阿保親王御遺跡の附近にてもあれば、定めて右の古塚は、我が推量の通りであつたらうと思ふ。

一〇 無言の談判

或旅行家の話に、外國を周るに、其の國の言語、凡そ二百語位を記憶すれば、單なる旅行用辨に差支なきものなりといふを聞きしが、或る極端の場合に於ては、全然一語不通にても、日常の用だけは辨ぜらるゝものである。過ぎし明治三十二年、著者が印度洋を経て西遊せしとき、日本郵船の神奈川丸に香港から乗り込んだ西班牙國陸軍將校の一家族があつた。其は佐官位の主人夫婦に老母子息並に弟であつたが、此數人の全家族中一語も自國以外の語を知つた者が一人もなく、一方船員並に乗客の中に、西語を解する者が亦一人も無かつた、唯船長の蘇國人が一小冊の英西辭書を持つて居たのを便りに、双方口に讀むことは出來ぬが、指で文字を指し示して、食事の献立位を交渉するを得たのであつた。然るに船が古倫母に着くと、土人の土産賣りが押しかけて來る。すると彼の一族が買ひ物をする、その様を見てありしに、先づ此方が欲し

き品物を手に取りて、一枚の銀貨を出すと、商人は頭を横に掉つて品物を離さない、更に銅貨を添へてもまだ、横に掉り、今度は彼方が持合の銀貨を出してならべて見せる、即ち價格に相當するだけのものである。すると此方が頭を横に掉る。互ひに貨幣と物品とを、一たびは出だし、一たびは引つ込め、一上一下揉み合ふ程に、結局妥協點に到達するや、互に頭を豎に掉つて賣買を了した。著者はその時感心して、大に我等啞黨の意を強くするに足るを喜ぶと同時に、満足なる意思表示に。頭を豎に掉り、不満のときに横に掉るは蓋し萬國同風で、生理心理の關係上已むを得べからざる約束たることを思うたのであつた。實際所謂『身振言語』は世界萬國共通である。

日本語原 終

大正十五年六月十日印刷
大正十五年六月十五日發行



定價金三圓八十錢

著者 井口 丑二

發行者 下中 綠

印刷者 志賀 主殿

株式會社 平凡社

東京市神田區錦町三ノ三
振替東京 二九六三九番

大取次

東京 東海堂
東京 文盛堂
東京 堂
北隆館
栗田書店
文行社
大阪 柳原書店
京都 大坪書店
名古屋 川瀬書店
星野書店
九州 大栗田書店
九州 菊竹書店

